

オレンジペコー



そしてまた、「ぼーか」と最後に付け足した。

「何もしねーくせにメシ食ってるやつに言われたくねーよ」

少年が初めて父親に返事を返した。が、視線は自分の足元に向いていて、父親の顔は見なかった。

「しょうがねえだろ、病気なんだから」

「なんでもかんでも病気を言い訳にしゃがって」

「ああ？」

父親は、少年に攻撃的な視線を向けたが、少年はそれを無視して玄関を出た。

「さっむ」

季節は冬。少年は、白い息を吐きながら両手を上着のポケットにつっこんだ。

「郁実、おっはよ！」

ネイビーのスーツに、ベージュのコートを着た女性が後ろから少年に声をかけ、肩をぽんと叩いた。少年の通学路は、学校に向かう学生や、仕事に行くために駅に向かう大人で、少し混雑していた。女性は駅に向かっていった。

「ああ、美雪さん、おはようございます」

「あ、イライラしてるでしょ？」

美雪が、郁実の顔を見るなり指さして言った。郁実は、「そんなことないですよ！」と笑ってごまかしたが、美雪は「ほんとにわかりやすいなあ」と笑った。

「もう、顔を見れば一発よ」

「あ！俺の顔がイカツイのバカにしてるでしょ！」

美雪が「ははは」と笑った。

「ちがうわよ。そんなんじゃないわ。ほら、そうやってつかつかかってくるじゃない。やっぱり機嫌悪いじゃないの」

「別に、機嫌悪くないですって」

「なんですか、それ」

「あなたが今、全身から出してるオーラよ」

「背中だけじゃないんですか」

「ふふふ」と美雪が笑った。

「あのねえ、そんな暗いオーラ身にまとってたら、幸せ見逃しちゃうわよ？」

「はい？」

「あのね、人の周りには必ず、幸せがあるの。でも、それがいくらあったとしても、周りが暗くちや、見つけれないでしょ？」

「はあ」

「ね。だから、自分の周りを明るくして、幸せを探さない。そして見つけなさい」

「ああ…はい」

「いい？その目でしっかり見るのよ？」

「はい…」と言いつつ、郁実は美雪の顔を見つめた。

「私も、この目でしっかり見つけてやるわ」と、美雪は両手の指でメガネをつくった。

「でも、幸せって、目に見えないこともあるんじゃないですかね？」

郁実がそう言うのと、美雪は「そんなことないわよ」と、ゆびメガネを外した。

「家族だったり、友達だったり、好きな人だったり…。自分だけの宝物だったり、お金って言う人もいるかもしれないわ。とにかく、幸せってのは目に見えるものよ」

「私は、目に見えるものしか信じないわ」と、長い髪の毛を揺らした。

「…でもさっき、俺のオーラがどうか」

郁実にそう言われた美雪は、照れくさそうに笑うと「あんたのイライラオーラは目に見えるぐらい濃いんだよ！」と、郁実の背中をバシッとひっぱたいした。

「いって！」

「ほら、イライラオーラを飛ばしてあげたから、今日一日頑張んなさい！」

「じゃあね」と、背中をさすっている郁実に手を振り、背中を向けると、小走りに去って行った。学ラン姿の高校生と、それと手をつないだセーラー服の女子高生や、おしゃれな仕事スタイルでハツラツとした女性。くたびれたスーツに、それには似合わない派手で真っ赤なネクタイをつけた中年のサラリーマンなどの間を軽い足取りですりぬけて、背が高くスラツとしたスタイルの男性の所までたどり着くと、肩をたたいた。

「聡！」

「おお、おはよう」

その男性は、さわやかな笑顔で返事をした。二人は、一言二言話すと、美雪が郁実を指さした。聡が郁実に右手を挙げて挨拶し、郁実がそれに会釈で応えた。

「へ、ほめーよー」

学校での昼休み。郁実は仲のいい友人と昼食をとっていた。友人は、母親の作った弁当を食べ、郁実は、購買で買ったパンをかじっていた。友人が食べ物を入れたまましゃべるので、「飲み込んでから喋れ」と注意した。

「で、おめえよお」

「ん？」

「お前、まだ空手部入る気にならねえのかよ」

この友人は空手部所属で、何度も郁実を部に入るように誘っていた。が、郁実は首を縦には振らなかった。

「まだつつーか、ずっと入る気にはならないよ」

「なんでだよ、そんなに強いのによ」

「やだよ、そんな余裕は金にも時間にもないよ」

「お前だって、強いやつに勝ちたいって思うだろうよ」

「思わないよ、別に」

「試合とかで、強いやつを倒した時って、ものすごく嬉しいぜ？そういう感動を味わいたいと思わないのか？」

「だから、強いやつに勝ちたいわけじゃないんだよ、俺は」

「そうかなあ？お前には戦う人間の血が流れてると思うぞ？」

「なんだ、そりゃ」

「だってよ、お前、うちの主将ぶつ倒したじゃねえかよ」

「それは、あいつが俺のバイト先のお花を倒して、その上ふんづけたからだろ！」

「あんときのお前は怖かったぜえ。まじで、主将殺されんじやねえかと思つたもん」

「殺すわけないだろ！」

「いや、でも、お前の目からは完全に殺意が出てたぜ。数々の相手と試合をしてきた俺にはわかるんだよ」  
「もう、やめろよ」

郁実が少し、嫌な顔をした。友人は、そんな郁実の様子もお構いなしに話をつづけた。

「それに、戦意喪失してる主将をお前は殴り続けるしよ」

「やめろって」

「俺が止めに入らなきゃ、やばかったもんな！マジで主将死んでたと思う」

「殺さないよ。もう、やめろよ、その話」

「それによお、おめえ…」

「ん？」

「殴ってるとき、楽しそうだったぜ？」

友人はふざけて笑っていたが、郁実は真剣な顔だった。

「…笑ってたか、俺」

「いや、笑ってはなかったけどよ、なんかこう、相手がダメージを負うことに手応えを感じてるような、それを喜んでいるような…そんな雰囲気を感じたけどな」

「…そうか」

「あれ以来、主将は完全にお前にビビってんもんな！」

「ふん」

『あいつは怖い、あいつの目はもう見たくない』ってしきりに言ってたもんな」

「貧弱な主将だなあ」

「いや、あれでも結構強いんだぜ？俺は嫌いだけどな」

「嫌いなのか」

「だからよ、お前が入ってくれればよ、主将、うちの部やめると思うんだよ。だから、お前が入って、主将追い出してくれよ！」

「おめー、それが狙いなんじゃねーか！」

そう言うと、二人で笑った。郁実は、やっと笑う事が出来た。笑いながら、友人が「頼むよ」と言ったが、郁実は「やーだよ」と断った。

「どうですかね？」

「んーんーんーん？」

放課後、郁実はアクセサリー作りを教えてくれる師匠の工房に来ていた。師匠は、ひとりで工房を開いている職人だったが、さまざまなお店から仕事の依頼のある売れっ子の職人だった。郁実も、将来は自分でアクセサリーのデザインをしたいと思っている。郁実は、学校が終わるとバイトに行くか、この工房に通うのが毎日の日課だった。

「やっぱ、ハの字の癖が抜けてねえなあ」

「ああ…」

指輪づくりは、先端から末端にかけて徐々に太くなっていく棒に、細いひも状にした粘土を巻き付ける作業から始まる。その巻き付け方が下手だと、指輪が、指に入れる方向に開いてしまう。それを用語で「ハの字」と言った。郁実はその作業が苦手だった。

「お前さ、型使えばいいじゃん」

ハの字を防ぐために、サイズごとに分けられた円柱型の道具もあるのだが、郁実はそれを使う事を良しとしなかった。

「いや、あれで慣れちゃうと…。細かいサイズに対応できなくなっちゃうので…。指のサイズは、人それぞれですから…」

郁実がそう言うと、師匠は「こいつらしいなあ」と思い、ニコツと笑った。

「でも、いぶし加工はうまくなってるよ。キレイに彫れてるし、色にムラもない」

「ほんとですか！」

指輪に黒い模様を付けるいぶし加工も、郁実が苦手としていた作業だった。粘土が乾燥した状態のときに、やすりなどで表面を彫り、粘土を焼いたあとで硫黄に浸して黒く染める。そして、その状態で表面を磨くと、彫った部分だけが黒く残り、模様となる。

「ああ、あとはデザインセンスだな」

「がはは」と師匠が笑った。郁実は、「かっこいいと思うんですけどねえ」と口を尖らせた。

「いや、かっこいいよ。かっこいいと思う。ただよ、なんか、キレイすぎるんだよなあ…」

「キレイすぎる？」

「うん。なんか、カワイイぞ。女の子が好みそうだ」

「ああ〜〜〜」

「デザインはいいんだけどよ、お前っぽくねえんだよな」と言うと、師匠は「がはは」と笑った。

「どういう意味ですか！」と言いつつ、郁実は少し嬉しそうだった。

「お前、なんでアクセサリーつくりたいの？」

道具のあと片づけをしている郁実の背中に、師匠が質問を投げかけた。ただ、なんとなくだった。

「んー…？」

郁実は、少し考えた。それは、その疑問に対して考えてるのではなく、どう説明しようかという時間だった。郁実は、たどたどしく話し出した。

「いい、脇役…？だと思うん、ですよ」

「脇役？」

「はい。アクセサリーは、つける人が主役だとしたら、脇役です。でも、指輪ひとつ、ペンダントひとつあるだけで、その主役をものすごく魅力的にみせたりできる。そんな、脇役な感じがものすごく好きなんです」

「ほお…」

「結婚式とかでもそうじゃないですか。指輪なんてただの脇役だけど、結婚式で一番盛り上がるのって、その脇役が

登場する場面じゃないですか。その名脇役っぷりがすげえかつこいと思うんですよ」  
そう、笑顔で話す郁実を、師匠は微笑みながら眺めていた。

「なんか、お前らしいなあ」

「なんですか、それ」

「いや、なんとなくだけだよ」

「でもよ」と師匠は続けた。

「でもよ、お前自身は、誰かの脇役で終わろうなんて考えんなよ。ちゃんと、自分が主役の人生を生きなきゃいけないぞ」

「ははは…」と声を漏らしたあと、片づけをしていた郁実の動きが少し止まった。

「でも、それも悪くないと思うんですよねえ」

そう言うと、郁実は笑った。それを見て、師匠は「あきれたやつだな」と言うように、微笑みながらため息を吐いた。

駅から、郁実たちの住む家のある住宅地に向かう道の途中に、自販機と古びたベンチだけがポツンと佇む空き地がある。空き地なのに、自販機の中身は定期的に補充されていた。この空き地は、夏場は雑草がひどく生い茂る。冬になった今でも草は残っていて、地面を覆う絨毯のようになっていた。郁実は、工房やバイトの帰り道に、一日の終わりの缶コーヒーをこの空き地で飲むのが好きだった。

「はあ、あつたまる」

「ずずつ」とコーヒーをすすると、体中に熱がいきわたるのを感じた。

「お、きれいな三日月出てるなあ」

その日は、いつもより長くその時間を楽しんだ。

次の日。

「…あれ？」

仕事からの帰り道。聡が、道の上で足を止めている美雪を見つけ、近づいた。

「どうした？」

「…ああ、聡。いや、ちょっとね」

と、美雪が道の向こう側にある花屋を指さした。

「…花屋？」

「そー。あの子がバイトしてんのよ」

「…あ、ほんとだ。へー。あ、これ」

聡が美雪に缶コーヒーを渡し、自分の缶を開けた。美雪は「ありがとう」と受け取ったが、飲もうとはしなかった。

「あの子、頑張ってるなあ」

「な。でもなんか、楽しそうだ」

「あの子、お花好きだからね」

「へー…。あいつ、なんか、他にもやっつてなかったっけ？」

「そっちはバイトじゃなくて、習い事というか…。アクセサリーのデザイン習いに行ってるのよ」

「アクセサリー？」

「うん。将来、自分でデザインしたいんだって」

「へー。すごいなあ、毎日毎日。よく頑張るなあ。家帰って休まねえと体ぶっ壊れるぞ」

「うーん…。その家があんまり休まらないのかも」

「…そうなの？」

「あの子のお父さんが、ね」

「…問題ありなのか？」

「うーん、病氣、らしいんだけど…」

「体、弱いのか？」

「つていうより、精神的なものらしいんだけどね。でも、うーん、どうなんだろう」

「そういや、あいつのお母さんつて見た事ないな」

「昔、まだ、あの子が中学生だった頃、実家のある田舎に帰っちゃったんだつて。妹さん連れて」

「まだ中学生だったから、自分は働けないから、お母さんの負担になるつて、あの子はついて行かなかったらしいわ」

「そうか…。苦労してんだな」

「本当はついていきたかったんじゃないの？つて聞いた事もあるんだけど、『俺にはそれしかできないから』つて」

「それしか？」

「うん。お母さんに負担をかけないようにする事しか、出来ないからつて」

それを聞いて、聡はそれ以上聞くのをやめた。それ以上、何も言葉を続けられなかった。

すると、急に美雪が聡の手を握ってきた。急なことに、聡は戸惑った。

「うおお、どうした？」

「静かにして」

美雪が静かに言った。少し怯えているようにも見えたその姿に、聡は余計に困惑し、小声で声をかけた。

「どうした？」

「花屋の脇のミラー、見て」

「ミラー？」

「変な人がいる」

聡が、ミラーに目をやると、二人の後ろに、くたびれたスーツの中年男性が、二人からはちようど死角になる位置で

ケータイを見ていた。ケータイを見ているが、そのフリをして、二人の様子をうかがっているようにも見える。

「…ストーカーか？」

「まだわからない…。でも、なんか、見られてるような気はしてて…。それにあの人、朝も帰りも駅でよく見るのよ…」

美雪の手が震えだした。聡が、ストーカーに向かっけいこうとした。

「ちよつと、やめて」

「大丈夫だよ」

「勘違いかもしれないし…。それに、こつちが勘違いしたつて理由で逆上なんかされたら怖いわ。今日は、やめておいて」

怖がつている様子の美雪を見て、聡はそれ以上何もしなかつた。

「今日は、このまま帰りたい」

美雪がそう言うので、聡は「わかつた」とだけ言い、二人で歩き出した。

「…ん？あれは、美雪さんと…」

花屋の外に出てきた郁実が、二人を見つめた。

「…ん？」

その二人の後に続く、くたびれたスーツで、それには似合わない派手な真つ赤のネクタイをつけた、中年のサラリーマンの姿も見ていた。

「…あいつ、なんか見覚えあるな」

郁実は記憶を巡らせたが、思い出せなかつた。

「おはよー」

「あ、おはようございます」

朝のいつものあいさつだつた。しかし今日は、美雪の方からどんよりオーラが出ていた。

「…どうかしたんですか？」

「うん、ちよつとね…」

郁実の視界の端を、赤いネクタイがかすめた。

「ん？」

郁実はそつちに目を向けたが、もう見つからなかった。

「なに？」

と美雪が聞いたが、郁実は「いや、めちやくちや美人がいて」とごまかした。「なによそれ」と美雪が少し笑った。その笑顔を見て、郁実は少し、ホツとした。

「じゃあね」

美雪が聡の元へと走り、いつものあいさつをして別れた。

郁実はその日一日、朝の美雪の様子が気になっていた。いつも、「明るくなきや幸せを見逃す」と言っている人だ。その美雪がああいう状態になることは珍しい。郁実はそれが気になり、何をしても上の空だった。授業中、男性教師から「ぼーっとすんなー」と言われ、思わず「うるせえ」と言ってしまう程だった。そのあと、めちやくちや怒られたのだが。

「あ、聡さん！」

花屋でのバイト中、店の前を通り過ぎる聡を見つけ、呼び止めた。

「ん？おー、少年。どうした？」

「あー、いや…」

「どうした？」

郁実は一瞬、この人に聞いていいのかどうか迷った。

「…あいつのことか？」

聡は、訝しむ様子もなく聞いた。郁実は「はい…」と答えた。

「いや、あの、俺が気にする事じゃないのかもしれないですけど…」

「なんだ？言ってみろ」

「はい…」

郁実は、朝の美雪の様子が気になったことを尋ねてみた。

「なんだ、そういう事か。そんなもん、普通に聞きやいいじゃねえか」

「いや、おせっかいな事言っちゃったら悪いですし…」

「んなこと思わねえよ。お前、いやつだなあ」

聡が笑った。その後、「いや、実はな…」と話し出した。

「ストーリー…」

「そうなんだよ。ただ、勘違いかもしれねえって」

「そうですか…」

「今んとこ実害もねえから、警察に言っても動いてくれないだろうし…」

「そうですね…あまり大げさにしてもって感じですよね」

「そうなんだよ。そうなんだけどよ、結構おびえちゃっててよ…」

「そうなんですか」

「ああ。手ふるえてたよ」

「手が？」

「ああ」

「そうですか…」

「それは、許せないですね」そう呟く郁実の目が、少し鋭い目になった。その目を見て、聡は、背筋がゾクツとする感覚がした。

「…ん？」

聡は、「優しくていいやつ」という印象を郁実に対して持っていた。その郁実の目から、そんな感覚を感じたことが信じられなかった。

「今日、美雪さんは？」

「…ん？」

「一緒じゃないんですか？」

そう尋ねた郁実の目は、いつもの「優しくていいやつ」の目だった。

「…気のせいかな」

「はい？」

「いや、なんでもないよ。いつもは一緒に帰ってるんだけど、今日は遅くなるらしくてさ、だから、あいつの仕事が終わったら連絡くれることになってるんだ。そしたら、駅まで迎えに行くよ。俺は一回家帰って着替えようと思って」  
「なるほど。その方がいいですね」

「うん」

「ちなみに、何時ぐらいになるかわかりますか？」

「終るのが九時ぐらいにはなるだろうつつつたな。だと、こっちに来るのは十時ぐらいかなあ。最近は大体そんな感じ」

「そうですか、ありがとうございます」

「お前は、バイトは何時までなの？」

「今日は閉店までなので、俺も九時までですね」

「そっか、大変だな、頑張れよ」

「ありがとうございます」

「おう、じゃあ、またな」

「はい、また」

そう言って、郁実が頭を下げ、聡は右手を挙げて挨拶をすると、帰っていった。

結局、美雪から聡に連絡が入ったのは夜の十時だった。十一時に駅で落ち合うと、美雪は「遅くなってごめんね」と謝ったが、聡は「いいよ、気にしなくて」と笑った。二人は一緒に歩き出し、色んな話をしているうちに、郁実がバイトをしている花屋の前に差し掛かった。

「あいつ…」

「が心配してたぞ」と言おうとして、やめた。いやなことではできるだけ思い出させたくなかった。

「あの子？」

「うん。あいつ、今日もここで頑張ってたよ」

「そっか。ほんと、毎日よく頑張るわね、あの子」

「な。かつこいいよ、あいつは」

その時、聡が中年男性と「どん！」とぶつかった。

「あ、すいません」

と聡は謝ったが、ぶつかった中年男性が左手で聡の肩をつかみ、「ぐい」と押した。

「あ？」

「聡！」

美雪が叫んだ。中年男性の手には、刃渡り十センチほどのナイフが握られていた。

「おい、まじかよ」

聡は思わず後ずさりした。

「お前は邪魔なんだよお」

中年男性が不気味に言った。くたびれたスーツには似合わない、真っ赤なネクタイがやけに目についた。聡は、ナイフを警戒しながら、自分の肩にあるストーカーの手をどけた。

「うおっ！」

その瞬間、ストーカーが聡の腹に向けてナイフを突き出してきた。それを聡がギリギリでかわした。

「おいおい、しゃれんなんねえぞ」

避けていなければ確実に刺さっていた、と思うと、聡はひるんでしまった。それが伝わってしまったのか、ストーカーが「にやり」と気味悪く笑った。

「聡！」

美雪が叫んだが、聡にそっちを見る余裕はなかった。ストーカーがもう一度「にやり」と笑うと、一步前に踏み出した。その時、

「うわっ！」

ストーカーの上半身が急にのけ反った。

「え？」

見ると、郁実がストーカーの背中に飛び乗り、チョークスリーパーをきめていた。

「何だ、お前は！」ストーカーが叫んだ。

「お花屋さんだよ」郁実がストーカーの首を「ぐい」と締めあげ、自分の足を地面につけた。

「郁実！」

美雪が叫んだ。「聡さんー」と郁実が美雪の方を顎で示した。聡が美雪に慌てて駆け寄り、手を握った。美雪の手は震えていた。聡は「大丈夫、大丈夫」と、美雪を抱き寄せ、頭を自分の胸に押しあて、視界をふさいだ。

ストーカーが背中にいる郁実をナイフで刺そうと右手を振り上げた。郁実は、刺される前に首からストーカーを横にぶん投げた。

「ぐおっ」

ストーカーは唸りながらゴロゴロと転がると、すぐに立ち上がり、郁実にナイフを向けた。ナイフを目で確認した郁実が、ストーカーに向かって歩き出した。ナイフを見ても全くひるむ様子のない郁実に、今度はストーカーの方がひるみ、少し、後ずさりした。

「来るな！」

そう叫んで、ナイフを前に突き出した。しかし、郁実は足を止めなかった。

「刺すぞ！」

そう言って、郁実の目を見た。背筋に、「ゾクッ」と冷たいものが走った。

「くっそお！」

ストーカーがナイフを前に出して郁実に向かって一歩踏み出したが、その瞬間、郁実がストーカーの右手を蹴り上げ、ナイフを飛ばした。

「くそっ」

ストーカーがすぐにナイフを追いかけた。郁実もその後を追いかけた。もう一歩でナイフに手が届く、という所で、郁実が左手でストーカーの左腕を掴んだ。ストーカーの左腕に激痛が走り、思わず「ぎっ……」と声を出しながら、膝をついた。

「は、はなせ……！」

ストーカーが膝を地面につけたまま左腕をぶんぶんと振ったが、郁実の左手は離れなかった。

ストーカーは、「くっそお！」と体を伸ばして、近くに落ちていたナイフを右手で拾った。

「はなせよお！」

そう叫んで、右手に持ったナイフで郁実の左腕を刺した。「ズブリ」という鈍い音がした。しかし、郁実の力が弱まる事はなかった。

「くっそ！なんでだよ！」

と言いながら、郁実の左手にいくつも刺し傷を作った。が、全く離れる様子のない左手に、恐怖を覚えた。

「もう、何で離れねえんだよお！」

ストーカーは泣きそうな顔になっていた。ターゲットを変え、顔を刺そうとそっちを見た。郁実の口元が、笑っていた。その顔を見たストーカーの背筋に、また冷たい感覚が走った。郁実が、右手でストーカーの顔面を殴った。「ガツン！」という音が響いた。

「ぐあっ！」

倒れそうになったストーカーを、郁実がぐいっと引つ張った。そして、もう一度右手で殴った。「ガチッ！」という音がした。聡が、「郁実！」と呼んだが、聞こえてないようだった。また、「ゴツッ！」という音が響いた。

「おい！」聡が、今度は怒鳴るように言ったが、郁実の耳には届かず、また、「ゴツッ！」という、骨と骨がぶつかる音がした。ストーカーは、気を失い、体がだるんとしていた。

「やめろ！」聡が叫んだ。その声に、美雪が「郁実？」と聡の胸から離れようとした。「見るな」と美雪をおさえた。もう一度、「ガゴッ！」という音が響いた。

「おい、郁実！」聡が叫んだ。その声を聞いて美雪が無理矢理、聡の胸から離れた。聡は「おい」と美雪の手を掴んだ。

「郁実ー！」

美雪が悲鳴のように叫んだ。その声が、郁実の耳に届いた。郁実が、ストーカーの腕を離し、美雪を見た。美雪は、聡と手をつなぎ、目に涙を浮かべてこっちを見ていた。

「郁実、もうやめろ」

聡がそう言うと、郁実がストーカーを見た。ストーカーは、ボコボコに腫れあがった顔で、地面に倒れていた。もう一度、郁実が二人を見た。聡が、「もう、やめろ」と言った。郁実が、「ちつ」と舌打ちをすると、「はあくあく」とため息を吐き、ストーカーの顔の近くまで近づいた。

「おい」と、ストーカーの頭を足で軽く蹴った。ストーカーが目を開き、上体を起こした。郁実がストーカーの目の前にしゃがんだ。郁実を見たストーカーが「あ、あ」と言葉にならない声を上げ、失禁した。「こ、殺さないで……」そんな言葉が、口について出ていた。郁実が、「もうあの人に近づくなよ？」と言いながら、近くに落ちていたナイフを拾った。ストーカーが、首をぶんぶんと大きく何度も縦に振った。

「次お前をみかけたら」と、ストーカーの左胸に刃の先端を軽く当て、目をにらみつけた。

「わかるよな？」

そう言った郁実の目の冷たさに、ストーカーの恐怖は限界に達し、「う、うわあああくあく！」と叫びながら、走って逃げだした。郁実は、「はあ」と立ち上がり、ナイフを放り投げた。

「郁実！」

美雪が郁実の名前を呼んだ。郁実が振り返った。

「美雪さん……」

美雪は、怯えた目をしていたが、聡の手をしつかりと握っていた。郁実が小走りに二人に近寄った。

「無事……ですよね？」

そう言う郁実は、いつもの「優しくていいやつ」だった。聡が「おう」と返事をした。

「今、警察に通報したからよ」

「ありがとうございます。捕まるといいんですけど……」

「交番も駅の近くにあるし……失禁したおっさんなんてすぐ見つかるだろ」と聡が半笑いで言った。「それもそうですね」と郁実も笑った。

「ちよつと！腕！」

美雪が大きな声を出した。郁実の左腕が血だらけになっているのに気付いた。郁実は、「ん？ああ……」と、左手を開い

たり閉じたりした。

「普通に動きますし：深くはキズついてないと思います。大丈夫ですよ」

冷静にそう言いながら、右手を左の脇に挟む郁実を見て、「こいつの『大丈夫』の基準はどうなってるんだ」と聡は少し笑った。

「お前は、すごいな」

「え？」

「俺は、一歩も動けなかった。情けない話だが、怖かったんだ。刃物を見て、すっかりびびっちゃった。こいつを守るために、何もできなかつた。ほんと、情けない男だ」

と、聡が自分を嘲笑するように言った。

「何言ってるんですか」

郁実が微笑んだ。

「守ってたじゃないですか。しっかり手を握って。抱きしめて。守ってたじゃないですか」

郁実にそう言われ、気が付くと、聡は美雪の手を力強く握りしめていた。

「さっきのあなたは、美雪さんにとって、とても心強い存在だったと思いますよ」

美雪と聡が、お互いの目を見て、微笑みあった。

郁実は、その二人の様子を見て、安心した。

「とにかく、病院行こう」

美雪がそう言い、三人で病院に向かった。

あの事件の次の日。警察から聴に、あの男を捕まえたという連絡が入った。それからあの真っ赤なネクタイの男は見なくなり、数日経って、美雪もすっかり元氣を取り戻した。相変わらず、朝、郁実と会うと、「おっはよ！」と言いながら背中を「バシッ！」とたたくのだった。いつもの朝を取り戻したことに、郁実は安心していた。

郁実も、わりと平和に過ごしていた。左腕に傷跡が残ったが、全く気にしていなかった。相変わらず父親はうっとおしかったが、「いつものこと」程度のことだった。

「コーヒー飲もう〜」

花屋でのバイトからの帰り道。缶コーヒーを買おうと、いつもの空き地へ寄った。

「…あれ？」

そこには、美雪がいた。郁実は、そーつと近づいた。

「なにやってるんですか？」

「わっ！」

驚かせないように近づいたつもりが、逆に驚かせてしまったようだ。郁実が「すいません」と謝った。

「ああ、郁実…」

「どうしたんですか？もう遅いですから、早く帰った方がいいですよ」

「うん、そうなんだけど…」

と、美雪は郁実の目を見ずに地面をキョロキョロと見回した。

「…何か、落としたんですか？」

「うん…」と美雪が話し出した。

「明日、会社で会議があるのよ。その会議で使う資料をまとめたデータが入ったUSBをね、落としちゃったみたいなのよ」

「あらら」

美雪が焦っているのが目に見えてわかった。

「会社に置いてきたって事はないんですか？」

「あるかもしれないけど…可能性は低いなあ…。会社から帰るときに、しつかりカバンに入れたはずなのよ。で、今ここで紅茶買おうとして、財布を出したときに、何か落とした気がして…。で、カバンの中を見てみたら、そのUSBがなくて…。落としたのはそれだったのかもって」

「そうですか…」

しかし、今は夜の十時だ。女性がひとりで外にいるのは好ましくない。

「どんなのですか？」

「ミッキーの形の、黒いやつなだけけど…」

「黒のミッキー…」

黒と聞いて、郁美は残念に思った。明るい色なら、まだ少しは見つけやすかったのだが。

「やっぱり、今日はもう遅いから帰りませんか？こう暗くちや、見つかる物も見つかりませんよ」

「うん…」とは言ったが、帰る様子はない。

「明日の朝、ちよっと早めに来て、少し探してみましよう。明るい状態で探したら、意外と見つかるかもしれない。それでもなかったら、会社にあると思って」

「そうね…」

「ね、送って行きますから、帰りましよう」

郁美がそう言って、美雪はようやく、「わかった、そうするわ」と返事をした。送っていく帰り道、郁美が色んな話をしたのだが、美雪の顔から不安の色が消えることはなかった。

「送ってくれてありがとう」

「いえいえ。きつと、会社にありますよ」

「だといいんだけど…」

「俺も、朝早くに行つて探すの手伝いますから」

「ありがとう」

「じゃ、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

そう言って、美雪がドアを閉めた。

「ふわあ~~~~あ~~~~あ~~~~」

郁実の口から、でかいあくびが出た。

次の日の朝。

美雪は、いつもよりも三十分早く家を出て、あの自販機の空き地へと向かった。こころなしか、早歩きになっていた。「……え？」

空き地に着くと驚いた。郁実が、自販機に寄りかかって、いびきをかいて眠っていた。

「え、ちよつと。何してんの、あの子」

美雪が郁実に近づき、肩をたたいて起こした。

「ちよつと、何してんの？」

はじめ、郁実はぼーとした様子だったが、すぐに「ああ、おはようございます……」と目をこすった。そして、「あ」と自分のポケットを探った。

「これ、ありましたよ」

「え？」

ポケットから、黒いミツキーを取り出した。

「え、昨日からずっと、探してたの？」

「ははは。いや、見つけたら、眠っちゃったんですけど」  
最後に「ふわあ〜〜あ」というデカイあくびを付け足した。

「もう、なんていい子なの」

美雪は、心の中から緊張や不安が一気になくなり、ほっとして、泣きそうな顔になった。郁実は、その顔が見れて良かったと思った。

「ありがとう。本当にありがとう」

「いえいえ。見つかってよかったです」

そう言って笑った郁実の頭を、美雪が優しくなでた。郁実が照れくさそうに「へへへ」と笑った。

「必ず、お礼するからね」

「はい。それより、時間大丈夫ですか？」

そう言われて、美雪が腕時計を見た。大体、いつもこの辺を通る時間だ。

「そうね、そろそろ行った方がいいかも」

「はい、行ってらっしゃい」

「ごめんね、今度、ちゃんとお礼するからね」

そう言って、美雪が立ち上がった。郁実は、「はい」と答えた。

「本当にありがとうね！」

そう言うと、美雪は駅へと向かった。その背中を見送り、郁実は再び目を閉じた。冬の冷たい空気の中、自販機が発する熱が背中に当たって心地よかった。少しすると、美雪が、首をかしげながら戻ってきた。

「…ねえ？」

その声に、郁実が目を開いた。

「はい？」

「私が会社ってことは、あなたも学校行くんじゃない？」

「・・・?」

郁実がハツとした。

「そうだ！俺、別に休みじゃない！」

そう言っただけで慌てて立ち上がり、リュックを拾った。

「行きましよう！」

そう言っただけで、郁実が急いで歩き出した。

「はい、行きましよう」

美雪が笑いながら郁実の後に続いた。

「お前、昨日、家帰った？」

昼休み、友人が弁当を食べながら言った。

「なんで？」

「いや、なんか妙にきつたねえし…。それに、お前の教科書、昨日の時間割のままじゃねー？」

「あー、いや、まあな」

郁実は、説明するのがめんどくさいので、適当にはぐらかした。友人が、心配そうな顔になった。

「…ついいいか？」

「ああ？」

「ついになのか？」

「だから、何がだよ」

「家、なくなつたのか？」

「なくなつてねーよ！」

郁実が笑いながら否定した。友人が郁実の肩に手をぼん、と置いた。

「ホームレスなのか？」

「ちげーよ！」

「ごめんな、うちはもう空いてる部屋ないんだ」

「いらねーよ！」

「あそこ住めば？あの、自販機のある空き地」

「そこ住んだら、それこそホームレスだろうよ！」

二人で笑った。それを周りで聞いていた数人のクラスメイトも笑っていた。

「…それ、全部食べるの？」

美雪が目丸くした。美雪が、「お礼に」と、バイキング形式の食べ放題に誘った。郁実の目の前には、軽く五人前はあろうかという量のごちそうが並んでいた。

「はい。全部食べてからじゃないと、おかわり行っちゃいけないルールみたいで」

「えっ」

「えっ？」

美雪は「おかわり」という言葉が信じられなかった。

「ああ、うん、そっか。たーんとお食べ」

「はい」

郁実が食べ始めると、目の前の料理がみるみるうちになくなっていった。美雪は、その光景に目が釘づけになり、思わず、「あら〜」という声が漏れた。

「これ、ありがとうね」

美雪が、黒いミツキーを取り出した。郁実が、食べ物をお口にほおばりながら、「ひへひへ」と右手を横に振った。

「本当に助かったわ。ありがとう」

そこで、やっと口の中のものが飲み込めた。

「いえいえ。会議は大丈夫でしたか？」

「うん。無事に終わったわ」

「それは良かったですね」

「郁実のおかげだよ、ありがとう」

「こつちこそ、こんなご馳走、ありがとうございます」  
そう言う郁実は、デザートに入った。もちろん、一人前ではない。

「私は、郁実に助けられてばかりね」

「…そんなことありませんよ」

「ストーリーカードだってやつつけちゃうし…」

「あー、ははは」

美雪の視線が、自然と郁実の左腕に移った。

「…傷跡、ちよつと残つちやつたわね」

郁実は「ふふふ」と小さく笑うと、「カツコイイでしょ？」と自慢げに言った。

「…ねえ？」

美雪がそう郁実を呼ぶと、郁実は「はい？」と口の中にケーキをほおびりながら美雪の顔を見た。

「私は、郁実の、なんなのかね？」

「なんですか、それ」

「郁実は、私に優しいね。私の目の前に障害物ができると、郁実がどかしてくれる。私の力じゃ重くて動かせないぐらいのものでも。そこまでしてもらえる私は、郁実にとって、なんなんだろうと思つて」

美雪が、頬杖をついて郁実を見た。

「ん・・・」

郁実が持つていたフォークを皿の上に置いた。

「俺、なんにも出来なかつたんです」

「え？」

「母さんが出ていくとき、俺、なんにも出来なかつたんです。あの人を助けるために。せめて、負担をかけないようにつつしか、出来なかつたんです」

「うん」

「それが、悔しかったんです。力がない自分が」

「…そんな事ないわよ」

「だから、あの時決めたんです。大事な人が困ってたら、全力で助けるって」

「…そっか」

「はい」

「じゃあ、その気持ちを、守れてるわね」

「…だといいですけど」

「守れてるわよ」と美雪が紅茶をすすった。そして、カップを置くと、もう一度、「そっかあ」と言った。

「大事な人かあ」

美雪がニヤニヤして郁実を見た。郁実の目がものすごい速度で泳ぎ、喉元から「ごぶっ」という聞いたことのない音が出た。

「ちがいますよ？ちがいますよ？」

郁実が慌てた。

「その、大事な人って、あれですよ？」

「なにですよ？」

「お姉ちゃんですよ？」

「お姉ちゃん？」

「はい、お姉ちゃんです。そういう、大事な人です」

美雪が、頼杖をついたまま、郁実の目を下から見上げた。郁実は思わず視線を美雪からケーキに移した。

「ふーん、そっか」

と、美雪は紅茶をすすった。心の中で「本当にわかりやすいなあ」と思いながら「お姉ちゃんかあ」と微笑んだ。

「ちょっと、コーヒー買っていいですか？」

「ん、いいよ」

郁実が近くで光っていた自販機まで軽く走った。その間、美雪はスマホで時刻を確認した。

「どうぞ」

郁実が美雪に小さいペットボトルを差し出した。ストレートの紅茶だった。

「あら、ありがとう」

「いえいえ」

美雪がペットボトルのふたをひねった。

「しかも、ちゃんと紅茶だもの。わかってるわね」

「いっつも紅茶飲んでるじゃないですか」

「君は偉いねえ。あの男なんか、なくんにも気づきやしないのよ？」

「そうなんですか」

郁実が苦笑いした。

「そうなの、いっつもコーヒー買ってくるの。紅茶の方が好きなのに」

美雪が笑いながら紅茶を口にふくんだ。郁実には、その顔が少し寂しげに見えた。

「いらっしやい：あら、珍しい」

「おう」

郁実がバイトする花屋に、聡が現れた。

「プレゼントですか？」

「そんなガラじゃないよ」

聡がカウンターに腰を預けた。郁実は「喜ぶと思いますよ」と言ったが、聡の耳には届いてない様子だった。

「お前、今いくつだっけ？」

「高二です」

「高二か…」

「はい」

郁実は、「知らなかったのか」と心の中で少し呆れて苦笑いした。その郁実に、聡が唐突に言った。

「お前は、将来はどうするんだ？」

「え？」

「夢とかあるのか？」とつづけた。

郁実は「急にどうしたんだ？」と思いながら「ん、いろいろ考えてるんですけど…」と話し出した。

「アクセサリーのデザインやりたいんです。それで、今、勉強中なんですけど」

「ああ、知ってる。あいつから聞いたよ」

「でも、お花も好きですし。自分で店を持つのも、楽しいかなあって…」

「迷ってます」そう言っ、郁実は笑った。

「いいじゃんか、どっちも叶えたら」

聡が当たり前のように言った。

「え？」

「どっちも叶えちゃえばいいんだよ。花屋もやるし、アクセサリーも作る。どっちなかできないなんてことはない」

「なるほど…」

「男はよ、夢はあきらめちゃいけないんだよ」

聡が、語りだした。

「夢ってのは、いわば、将来の仕事だろ？仕事ってのは、武器だ」

「武器」

「そう。家族を守るための武器だ。その武器は、自分の使いやすい武器でなきゃいけない。戦いの場でよお、自分の手に持つて得物がいづらくちゃ、まともに戦えないだろ？」

「なるほど。確かにそうですね」

郁実は、「うまいこと言うなあ」と思った。とても説得力のある話だった。

「そう。だから、自分のやりたいことを仕事にするんだよ。夢を叶えるんだよ。じゃなきゃ、家族守れないぞ。だから、お前は、ちゃんとどっちも叶えろ」

郁実は、「はい、頑張ります」と答えた。

「聡さんは、その武器、手に入れたんですか？」郁実が聞いた。

「俺もいま、頑張ってる途中」

聡がにやりと笑った。郁実が、「途中でですか」と答えた。

「でも、いまやってる仕事は、自分のやりたかった仕事なんですよね？」

聡は、出版社に勤めていた。

「おう。でも、俺の夢は、もう一歩先なんだ」

「もう一歩先？」

「うん。俺は、自分の雑誌を持ちたいんだ」

「へえー、いいですね」

「それが叶っていない今は、まだ、武器を持つてるとは、言えないなあ」

「そうですか…。でも、近いところまでは来てるんですね」

「まあな」

「あと少し、だと思っ」と聡がつぶやいた。

「あと少し」

「うん。明日、それを実現させるための一歩になる、大事な仕事があるんだよ」

そう言う聡の表情は、少し、緊張を帯びていた。郁実は、今までの聡の話は、人に話すことで、自分に言い聞かせてるのだと理解した。

「これが叶ったら、あいつも、喜んでくれるんだろうな」

聡が郁実の目を見た。郁実も、「きっと、喜んでくれると思いますよ」と答えた。聡が「へへへ」と嬉しそうに笑った。

「…あ、忘れてた」

「え？」

「いや、差し入れにコーヒー買ってきてたんだった。忘れてた」

「あく、ぬるくなっちゃってんなあ」と言いながら、聡がコートの中ポケットから缶コーヒーを二本取り出し、一本を「ほらよ、ぬるいけど」と郁実に渡した。郁実は「いえ、ありがとうございます」と受け取った。

「あ…」  
「ん？」

郁実の漏らした声に、聡がコーヒーを口に流し込みながら反応した。

「あの、あの人は紅茶の方が好きみたいですよ？」

「…美雪？」

「はい」

「…そうなの？」

「みたいですよ」

「そっか。そういや、あいつ紅茶よく飲んでるな。なんだっけな、みかんみたいな名前のやつ」

「オレンジペコーですよ」

「そう、それ！お前、よく知ってるな！」

「いや、知らないですよ、何も」

「いや、いい事聞いたよ、ありがとう」

郁実がコーヒーのふたを開け、一口飲んだ。確かに、すっかりぬるくなっていた。

その週の土曜日。

美雪と聡は、久しぶりに一緒に出掛けていた。お互いの仕事が忙しくて、なかなか予定が合わず、約二ヶ月ぶりのデートとなっていた。

大きい駅に隣接した複合商業施設に行き、映画を見たあと、レストランでランチを食べ、ショッピングモールでお互いの見たい店を見るといふ地味でありきたりなプランだったが、二人は思いつきり楽しんでいた。

ショッピングモールを歩いている時、聡のコートの裾を、「ぐいぐい」と下から引っ張られた。

「ん？」

聡が下を見ると、小さな男の子が見上げていた。

「ねー？何食べたらそんなに大きくなるの？」

「え？」聡は、純粹な子供の質問が微笑ましく、思わず笑ってしまった。

「なんで？」

「みーちゃんがね、背の高い人が好きだって言ってたから」

「ははは」純粹な質問のあとに、急に大人びた言葉が返ってきて、思わず大声で笑ってしまった。そこに、「すいません！」と高校生ぐらいに見える小柄な女の子が小走りに近寄ってきた。

「こら、だめでしょ」

「すいません」と女の子は美雪に頭を下げた。そこで、この女の子が男の子の母親だとわかった。美雪も「いえいせ」と笑顔で対応した。聡が男の子の前にかがんだ。

「お母さんが作ってくれたご飯を、好き嫌いせずに全部食べたら、大きくなれるよ」

「お野菜も？」

「うん。お野菜も」

「そっかー」

「ほら、ゆうくん、お父さん待ってるから行くよ」

「はい」

母親が男の子と手をつなぎ、「すいませんでした」と二人に何度も頭を下げて、近くに寄ってきた父親の元に歩いて行った。聡と同じぐらい背の高い父親は、男の子よりも小さい赤ん坊を抱いていた。美雪が「ゆうくん、ばいばい」と手を振り、男の子も「ばいばい」と手を振り返した。聡は男の子の父親と会釈で挨拶し合った。

「お父さんに似るといいなあ」

「そうねー」

聡と美雪は、家族を見送りながら、その姿に、将来の自分たちの姿を重ねて考えていた。

「…私たちも帰ろうか」

「…そうだな」

二人は、駅に向かった。

「ちよつとコーヒー買って来ていいか？」

自宅の最寄りの小さな駅に着くと、聡がそう言って自販機に走った。美雪は「うん」と言いつつ、スマホをいじった。

「…あ」

聡が、いつものようにコーヒーを二本買おうとして、手を止めた。そして、二本目は紅茶のボタンを押した。

「お待たせ」

そう言って、聡が紅茶の小さいペットボトルを差し出した。

「ありがとう」

と美雪は、スマホの画面を見たまま、軽い感じで受け取ったのだが、受け取ったものが缶でない事に気づき、自分の手を見、その後、聡の顔を見上げた。

「…紅茶？」

「うん。好きなんだよな」

美雪は嬉しくなって、くしゃつとした笑顔になった。

「やつとかあゝ」

そう言いながら、くしゃくしゃの笑顔のまま、ペットボトルのふたをひねった。

「ああこれな、あいつから言われてさ」

聡からそう言われ、美雪のふたをひねる手が止まり、顔から笑顔が消えた。

「…え？」

「いや、これさ、あいつが教えてくれたんだよ。お前は紅茶の方が好きだつて」

「…あの子が？」

「そう。あいつ、いいやつだよな」

聡は笑顔でそう言ったが、美雪の顔は曇っていた。そして、「はあ…」と大き目のため息をついた。聡は、美雪の意外

な反応に少し戸惑った。

「あなたって、なんでそんなに優しくくないの？」

「…はあ？」

美雪には郁実の顔が浮かんでいた。

「あなたは本当に優しくくない。そして、弱いわ」

「私はね、あなたが私の事を考えて、そして気が付いて、それで、こうしてくれたから喜んだのよ。誰かから『教えられたから』でこうされても、嬉しくもなんともないわ」

「なんだよ、怒ってんのかよ」

「ストーカーに追われた時だって、あなたは戦ってくれなかったじゃない！」

「いや、あの時は…」

「強くもなければ、優しくもない！本当に優しくくない！」

「悪かったよ、ごめん」

「あなたの言うことがもし本当だとしたら、あの子は本当に優しいわね。そして、強いわ」

「本当に強い」そう言いながら、美雪は、郁実が言った「大事な人です」という言葉を思い出していた。

「少しは見習ったら？」と、少し挑発的に言った。聡は腹の底が燃え上がる思いがし、その熱を吐き出すように言った。

「弱いだの、優しくくないだの！いい加減にしろよ！弱かろうが、優しくなかろうがな、俺はこういう性格なんだ！これが俺なんだよ！」

聡がそう言い放つと、美雪の顔が、怒りと悲しみと疑問が混ざった、歪んだ表情が変わっていった。

「これが俺？」

美雪の声は震え、目は涙でいっぱいになっていた。

「じゃあ、私は何なのよ！」

その言葉に、聡の顔から、苛立ちと疑問が表れた。

「はあ？」

「それがあなただだって言うんなら！私はいったい何なのよ！」

「なにがだよ！」

「好きな人からも優しくされたくない私っていったいなんなのよ！って言ってるのよ！」  
聡は、返事を返せなかった。

美雪は、今日一日、ズーッと楽しかった。本当に楽しかった。体中に幸せが満ちた日だった。そこに、聡の一言で、ほんの少しの不純物が混じってしまった。普段なら、それぐらいの事は気にならない。しかし、百点の幸せが手に入りそうになった時に、九十九点になってしまった。その失った一点が、美雪の悲しみにスイッチを入れてしまった。美雪は、立っていられなくなり、その場へたり込んだ。

「私の幸せ、どこにあるのよ！」

そのあと、美雪は言葉にならない声をあげて、ただただ泣き続けた。

「あ・・・」

郁実の、バイトからの帰り道。自販機のある空き地まで来ると、聡がいた。聡は、少しづつが悪そうに右手を挙げて「おう」と言った。郁実も、会釈で返した。

「ちよっと、いいか？」と、聡が空き地を指さした。郁実は、「はい、いいですけど・・・」と返事をし、二人で空き地の中へと入った。そして古びたベンチに座り、聡は自販機へと向かった。

「九時半か・・・」郁実はスマホで時刻を確認すると、そのタイミングで、聡が自販機から郁実に向きなおり、「コーヒーでいいよな？」と、微糖のコーヒーを差し出した。郁実は「あ、ありがとうございます・・・」と財布を出したが、「いいよ、そんなくらい」と聡は断った。郁実は、「すいません」と、ポケットに財布をしまうと、「いただきます」と言いつつ缶を開けた。郁実が、「ずずっ」と音を立ててコーヒーを飲んだ。聡は、ふたを閉じたままの缶コーヒーを手握ったままベンチに座った。そして、しばらく黙ってしまった。郁実は、気になりつつも、コーヒーを飲みながら黙って待つことにした。

「なあ」

「はっ？」

それっきり、聡はまた黙ってしまった。郁実はまた返事を待ち、「ずずつ」とコーヒーをすすった。

「なあ」

「はい？」

聡がコーヒーの缶のふたを開け、すっかりぬるくなってしまったコーヒーを一口飲んでから話し出した。

「強さって、なんだ」

「なんですか、急に」

「いやな、あいつに言われちゃったんだよ。お前を見習えって」

「…何かあったんですか？」

「…まあ、ちよつとな」

「…そうですか」

「強さ…ですか」と郁実がつぶやいた。聡が、「うん」と返事をした。

「優しさ、じゃないですかね」

「…優しさ」

「ええ。強くないと、人に優しくできないし、優しくないと、その人は強いとは言えない気がします」

聡は、美雪の言った「あの子は本当に優しい。そして、強いわ」の言葉を思い出した。

「優しさって何だろうな」

「自分の気持ちを殺せるってことじゃないですかね」

「自分の気持ちを殺す？」

「ええ。自分の気持ちは勘定に入れないで、相手のことを考える。それが、優しさだと思います」

「そしたら、自分が死んじゃわないか？」

「自分の気持ちを殺しても、自分の魂は死なない。それが、強さです」

「…なるほど」

聡は頭のなかで、「強さとは？」の郁実の答えを繰り返していた。

「お前は、強いな」

郁実は、一度、聡の目をみると、少し笑った。

「はい。俺は強いですよ」

そういうと、聡も「ははは」と笑った。

「否定しねえんだな」

「ええ」と言った後、郁実は「だって、」とつぶけた。

「俺が自分の強さを疑ったら、生きていけないですから」

今度は、聡が郁実の目を見た。

「俺は、お前のその強さが羨ましいよ」

郁実は、「別に、あなたは強い必要がないじゃないですか」と言った。

「あなたには、すぐそばに幸せがあるじゃないですか。俺は、自分が強くなければ、自分の平穩を守れません。でも、あなたには、すぐそばに幸せがある。それに、その幸せも、あなたのそばにあることを幸せに感じている。絶対的じゃないですか。あなたが強くいる必要なんて、これっぽっちもないじゃないですか」

「でもこの前、俺が弱いせいで、その幸せとケンカしちゃってよ…」

「ほら」

聡は「ん？」と郁実を見た。

「いま自分で『幸せ』って言ったじゃないですか。そういうことですよ」

聡の胸の中に、何かがストンと落ちた気がした。郁実は、微笑んでいた。

「お前、何でそんなに早く答えが出てくるんだ？」

「お花から教わりました」

「花？」

「はい。お花は、ただキレイに咲いて、人の幸せな場面を彩ったり、悲しみをやわらげたりするだけです。そのあとは、食べてもらう事も、供養してもらう事もなく、ただ、散っていきます。自分の都合や気持ちなんてありはしない。強くて、優しい。だから、あんなにキレイなんだと思うんです」

「お前は、花を見習ってるってことか」

「こないびつな見た目の花なんか 아닙니다けど」そう言つて郁実が苦笑いした。

「でも、あなたは弱くないと思います」

「なんで？」

「だって、『強さ』を俺に聞きにきたじゃないですか。ふつう、嫌ですよ。好きな人から『見習え』つて言われたやつに聞きにくるって」

「そうか・・・？」

「ええ。自分を強く見せたいやつは、自分より弱いやつを探すんです。強くなりたいたいと思つてる人は、自分より強い人を探すんです。少なくともあなたは、強くなるうとしてる。弱くは、ないですよ」

「少なくとも」と、郁実は一度息を吸つた。

「少なくとも、あなたのそばの幸せを、守るぐらいの強さはありますよ」

「大丈夫ですよ」と、郁実は聡の肩に手を置いた。聡は、「ありがとう」と頭を下げた。郁実は「とんでもない」という意味を込めて、微笑みながら首を横に振つた。

「でも」

「ん？」

「俺よりは弱いですけどね」

そう言つと、郁実がニツと笑つた。聡が「うるせえよ、コノヤロー」と郁実の頭をはたくと、二人で笑つた。

「でも、そうか…」と聡がつぶやいた。

「…うん」そうつぶやくと、聡の目が何かを決意した目になった。その目の変化を、郁実は見逃さなかつた。

「なあ」

「はい」

「ひとつ、お願いがあるんだけど」

「何ですか？」

聡は、郁実にひとつ、頼み事をした。

「うれしいです。でも、俺で、いいんですか」

「お前に、頼みたいんだ」

「わかりました。お受けします」

郁実は、笑顔で引き受けた。

聡が、美雪を空き地に呼び出していた。

「なによ、急に」

美雪には、聡に対しての怒りが、まだ少し、残っているようだった。しかし、出てきてくれたという事は、許そうという気持ちもあるのだろうと、聡は踏んだ。聡は、ベンチから立ち上がり、頭を下げた。

「こないだは、ごめん」

美雪からの返事はなかった。美雪は、腕を組んだまま、聡をまっすぐ見ていた。

「あの後、あいつの所に行ったんだ」

「あの子の？」

「うん」

「見習え」とは言ったものの、本当に行つたと聞くと、美雪は少し驚いた。

「あいつは…すごい。お前の言う通り、あいつは強いし、優しい。俺の強さじゃ到底敵わない」

美雪は黙って聞いていた。

「あいつは、花を見習って生きているらしい。花は、あいつよりも、強くて優しいんだそうだ。正直、俺には花の強さや優しさは、まだ、理解できない。それが理解出来るほどの強さも優しさも、持ってないんだと思う」

「…うん」

「ただ、これから少しずつ、強さや優しさを身につけていきたいと思う。だから、お前には、その俺の成長を、見守ってほしい」

「…うん」

「あの時、戦ってやれなくてごめんな」

美雪が首を横に振った。

「これからは、美雪が何が好きか、何をすれば喜ぶか。ちゃんと気が付いてやれるように努力するよ」  
美雪が、小さく微笑んだ。

「あの時は…、いや、今まで、本当にごめん。申し訳なかった」

聡が、もう一度頭を下げた。美雪が「ふう」と息を吐いた。

「いいよ。許してあげる」

美雪が、ニッコリと笑った。その笑顔を見て、聡も安心して笑顔になった。

「ありがとう」

「うん。私も、言い過ぎたと思う。…それにストーカーの時も、あの時、あの子も言ってたけど、あなたはそばに  
てくれたわ」

そう言って、美雪が微笑み、聡も微笑み返した。

「それでな、今日は、もう一つ言いたいことがあるんだ」

「何？」

「その、俺よりも強いあいつから、俺は『弱くはない』って言ってもらえたんだ。俺のそばにある幸せを守る強さは  
持つてるって」

「うん」

「だから、自信を持って言う。あのとき、美雪は言ったよね。『私の幸せ、どこにあるのよ』って」

「うん」

「その言葉に、答えを出すよ」

聡は、まっすぐに美雪を見た。

「幸せは、あなたのそばにあります」

「僕が、ずっと、そばにいます」

「結婚してください」

聡はもう一度深々と頭を下げた。

美雪は、驚き、そして、幸せな感情が湧き上がり、口に手を当て、涙を流した。聡が、顔を上げて美雪を見た。美雪は、指で涙をぬぐうと、

「はい」

と返事をして、優しく、微笑んだ。

「…お前、今日も残るのか？」

「はい、もう少し。いいですか？」

「俺は構わないよ。ただ、あんま無理すんじゃないぞ」

「はい、ありがとうございます」

「おう、じゃあ、またな」

と言って、師匠は帰って行った。その背中を、郁実は頭を下げて見送った。

「よし…」と、郁実が作業に戻ろうとしたとき、頬に冷たいものがふれ、「ひゃあ！」と男らしからぬ声を上げた。振り返ると、缶コーヒーを持った師匠が「へっへっへ」と笑っていた。

「なんですか、もう」

「へっへっへ、すまんすまん。コレ」

と、師匠が缶コーヒーを差し出した。

「あ、ありがとうございます」

「部屋ん中あつたけえから、アイスでいいだろ？」

「はい、嬉しいです」

「…大事な仕事なのか？」

「はい？」

「それ」

師匠が、郁実が製作している指輪のデザイン画を示した。

「ああ…はい、すごく」

「コレかい？」

と、ニヤついた顔の師匠が左手の小指を立たせた。

「違いますよ！」

「でも、ペアじゃん」

ノートには、大きい指輪と小さい指輪の二つが描かれていた。

「そうなんですけど、俺とじゃないです」

「…でも、大事なんだ？」

「…はい」

「ふーん、そうか」

師匠が、郁実の頭をガシガシと撫でた。

「じゃあ、こんどこそ本当に帰るわ」

「はい。コーヒー、ありがとうございます」

「おう。戸締りだけちゃんと頼むぞ」

「はい、もちろんです」

「じゃ、またな」

そう言って、師匠は帰っていった。郁実はまだ、頭を下げてその背中を見送った。ドアの閉まる音を聞いてから頭を上げると、缶コーヒーのふたを開け、一口飲んだ。

「…さて、やるか」

郁実は作業に戻った。

工房での作業に没頭してしまい、帰りが遅くなってしまった。時刻は、十時を回ろうかという所だった。しかし、充実したい時間だったと、郁実満足していた。冬の、冷たい帰り道。今度は、あったかいコーヒーが飲みたいと思っていた。

「…あ」

あったかいコーヒーを求め、空地に入ると、ベンチに座る美雪を見つけた。美雪は、何も言わず、笑顔で手を振った。郁実は、小走りに美雪に近寄った。

「おめでとうございます」

そう言つて、頭を下げた。美雪も、「ふふふ、ありがとう」と、膝の上で手を重ね、頭を下げた。

「今日は、何を探してるんですか？」と郁実がからかった。美雪が、「ふふふ、郁実をね」と笑った。

「…もしかして、待ってました？」

「ちよつとね、郁実と話したいなあと思つて」

「すいません。連絡くれれば、早く帰ってきたんですけど…」

「いいの、気ままに待つただけだから」

美雪はまた、「ふふふ」と笑い、郁実の顔を、左手で指さした。

「なんですか？」郁実が笑った。

「あなた、本当に私たちの結婚を喜んでくれてる？」

美雪も、少しからかうように笑った。

「もちろん、喜んでますよ。本当に、心から」

美雪は、「本当に？」と、笑いながら郁実に向けた人差し指をぐるぐると回した。

「私は、この目で見えたものしか信じられないのよ」

「証明できる？」と、郁実の顔を覗き込んだ。

「すぐ、わかりますよ」

郁実は、そう言つてほほ笑むと、自分に向けられた人差し指をつかまえた。そして、そのほかの指を優しくほどくと、薬指を右手でにぎった。

「うん」

そう、うなずくと、郁実は「じゃあ、帰りましょうか」と言つて、歩き出した。美雪も、「そうね」と言つて後に続いた。無意識に、左手をぎゅっと握った。

「それでは、指輪の交換を」

神父が言うと、新郎が新婦の左手をとり、薬指に指輪をはめた。

「これな」

新郎が言うと、新婦が新郎の顔を見た。

「この指輪な、あいつが作ったんだ」

新婦が指輪を見つめた。サイズもぴったりだった。

「わかった。信じるわ」

「ん？」

「んーん。なんでもない」

「お…」

郁実は師匠の工房に来ていた。作業を終え、道具を洗っているとき、師匠が珍しく声を上げた。

「コレ、作ったのか？」

「はい、そうですけど…」

「へえ」

と、師匠が、いま出来上がったばかりの指輪を手に取り、虫眼鏡で観察し始めた。

「これは、いいよ。ものすごくよくできてる」

「本当ですか！」

「うん、いぶしにムラもないし、ハの字にもなってる。デザインもすごくいいと思う。仕上がりがキレイだ。これなら、そこそこの値段をつけても文句ないよ」

「うっわ！嬉しいです！実は、それ、ちょっと自信あったんですよ！」

「うん。いい指輪だと思う。自信もっていいぞ」

そう言って、師匠が笑った。郁実は「ありがとうございます！」と深く、頭を下げた。

「うまくいったんだな？」

「え？」

「前に言ってた、大事な仕事」

「…はい、喜んでもらえたみたいです」

「だろうな。お前自身、成長してるよ」

「ありがとうございます！」

「感謝だな」

「え？」

「その、大事な人に、感謝だな」

「…はい。ほんと、あの人には、感謝してもしきれません」  
郁実が笑った。師匠は、いい笑顔だと思った。

「だな」  
そう言って、師匠も笑った。

夕暮れの帰り道は、とても心地が良く、体が軽かった。気づけば、飛び跳ねるように歩いていた。道中、小さい女の子と母親が笑顔で歩いているのに気づき、あわてて落ち着いているフリをした。

「…見られてないだろうな…」  
しかし、女の子の「あのお兄ちゃん、スキップ上手だねー」の一言で、その希望は打ち砕かれた。今度は、逃げるように早足で歩き出した。

「…あ、そういえば、晚饭なんかあったかな？」  
母親が手に持っていたスーパリーの袋を見て、ふと思いついた。

「…ま、適当でいいや、金もないし」  
また、飛び跳ねそうになる足を、意識して落ち着かせ、ゆつくりと家に帰った。

「おい」

郁実の父親が、鋭い目を向けた。

「あ？」  
郁実はその目を見ずに返事をした。

「こりやなんだよ」

「晚饭だよ、なんか文句あんのかよ」

「あるにきまつてんだろっ！」

父親が怒鳴った。

「これが晚饭とかなめてんのか！」

父親の目の前には、白いご飯と生卵が置いてあった。

「たまごかけご飯うめえだろうが」

郁実は構わず生卵をお箸でかき回した。

「晩飯だっつんならもつとマシなもん出せや！」

と、父親がご飯の入った茶碗を郁実に投げつけた。茶碗は郁実の額に当たって割れ、そこから血が流れた。その血が、かき混ぜていた生卵に混入した。

「てめえ、たまご一個ムダになつただろうが！」

郁実がテーブルを父親の方に向けて足で蹴った。

「てめえがゴミみてえなメシ出すからだろうが！」

父親が、蹴られたテーブルを手でひっくり返した。

「金がねーんだからしようがねえだろうが！」

「イヤミかこらあ！」

「事実だろうが！」

「なんだと、このやろう！」

父親が郁実の顔を真正面から蹴り飛ばし、郁実は「ぐっ」と声を上げ、その場に倒れた。

「事実だろうよ！お前が働かねえからこんなゴミみてえな暮らしなんだだろうが！」

郁実が、鼻血を乱暴にぬぐった。

「健康なら働いてんだよ！」

「てめえ、人けとばすぐらい元気なんじゃねえか！」

「うるせえ！」

父親が郁実の顔をふみつけようとした。郁実は、その足をつかむと、「ぐいつ」と引っ張って、父親を投げ飛ばした。父親は、壁に頭をぶつけ、その場にうずくまった。

「ぐ……このやろう、ふざけやがって」

すると、父親が、郁実の机の引き出しに手を伸ばした。

「あ！おい！」

そこには、郁実の作ったアクセサリーや道具が入っている。父親が、引き出しごと机から乱暴に引き抜いた。

「やめろ！」

「こんなもん作ってる暇あんなら金稼いで来いっつんだよ！」

父親は、引き出しを地面に叩きつけると、その中身を足で何度も踏みつけた。

「何すんだ、てめえ！」

「いってえ！」

父親の足の裏に、何か工具が突き刺さった。痛がっている父親の首根っこを郁実が背中からつかみ、そのまま父親の頭を床にたたきつけた。

「ぐう…」

父親はまたも頭を抱えてうずくまった。

「ふざけんな、このやろう！」

郁実は、父親の頭を何度も踏みつけた。父親は、はじめは「ぐっ」「うっ」と声を上げていたが、何度も踏みつけられるうち、次第に無言になった。

「ふざけたことしてんじやねー！」

父親は、気を失っているようだった。しかし、郁実は踏みつけるのをやめなかった。頭、腹、胸と、父親の体中を踏みつけた。

「右手…どこだ右手…!!」

郁実は、自分の引き出しを引いた父親の右手を壊そう思い、辺りを探した。

「…あ！」

しかし、郁実の目がみつけたのは、ぐにやぐにやに歪んだ郁実の指輪だった。

「…うそだろ…」

その指輪は、あの時師匠が「いい出来だ」とほめてくれた指輪だった。それを作れた事が自分自身の自信になり、これから夢を追う上で心の柱となるような、そんな作品だった。それが、ぐにやぐにやに歪んでいた。郁実は、まるで、

自分の夢が踏みつぶされ、へし折られたような、そんな気持ちになった。郁実の中で、何かがプツンと切れた。郁実は、黙ったまま指輪を拾うと、外に出た。

「あら…」

美雪が仕事帰りに歩いていると、頭にポツポツと雨が当たるのを感じた。手をかざすと、急にその勢いが増し、一気に大雨になった。

「うわ、ちよっと!」

慌ててカバンの中から折り畳み傘を出し、傘を開くと、雨が傘に当たる音が耳に響いた。

「ふう…。早く帰ろっと」

再び歩き出し、いつもの空き地の前を通るとき、空き地の奥の古いベンチが気になった。

「…人？」

誰かが、傘も差さずにただ茫然としていた。その様子や雰囲気から、思わず「おばけ？」とつぶやいてしまった。しかし、そのおばけの正体がわかると、慌てて駆け寄った。

「ちよっと! なにしてんの、あの子!」

おばけの正体は、郁実だった。

「ちよっと! 何してんの! 傘も差さないで!」

郁実が、うつろな目を美雪に向けた。美雪がハンカチで郁実の顔の雨水をぬぐった。

「ああ、美雪さん…」

「何やってんのよ、こんな所で」

「いや…」

美雪が、郁実の左手の中にあるつぶれた指輪に気づいた。袖口から、あの時についた傷跡が少しだけ見えていた。

「俺の指輪、つぶれちゃって…」

郁実は、絞り出すように言葉を紡ぎだした。

「俺は、なんでいつも…」

美雪は、指輪がつぶれた事以上に何かがあったのだと、察しがついた。美雪は、雨水に濡れた郁実の顔をもう一度ぬぐい、二つの目を、よく見えた。涙は、流れていかなかった。「本当に強い子だ」と思った。

「そっか。悲しいことがあったのね」

郁実が、美雪の顔を見た。美雪は、微笑んでいた。その笑顔の意味は、郁実にはわからなかった。美雪が、話し出した。

「きつと今、郁実の周りは真っ暗で、何も見えない状態なのかもしれないけど、でも……」

美雪は言葉をつづける前に、あの時、この空き地で感じた幸せを思い出していた。その幸せが、笑顔の理由だとは、郁実にはわかるはずもなかった。

「あなたの幸せは、あなたのそばにあるはずよ。それは、わかってなきや」

「幸せ……」

「私は、自分の幸せをちゃんと見て、信じたの。その幸せからまた力をもらって、また新しい幸せをつかむことができたわ。だから郁実も、自分には幸せがあるって事を、ちゃんとわかってなきや」

郁実は、美雪の目を見て言った。

「それをわかったら、俺は……？」

美雪も、その眼をまっすぐ見た。  
「そうよ。よく思い出してごらんさい。あなたには、遠くに離れているけど、お母さんや、妹さんだっている。友達だっている。それに、あなたには夢だつてあるじゃない。とつても素敵な夢が」

「夢」と言われ、郁実は、自分の左手にある歪んだ指輪を改めて見た。その郁実に、美雪が言った。

「壊れても、また作ればいいじゃない。あなたは、こんなに素敵なものが作れるのよ？」と、左手の薬指を見せ、微笑んだ。郁実は、自分でも、どんな顔をしているのかわからなかった。

「あなたは？」

郁実の心の声は、外に出ることはなかった。

「あなたは、いないの？」

そんな、郁実の心の声が届くはずもなく、美雪は笑顔で「ね。たくさん幸せがあるでしょ？」と言った。

郁実の目には、もう何も映っていなかった。

「帰ろう」

美雪がそう言ったが、郁実は「……どこにですか？」と答えた。美雪は、「そっか」と答えた。

「独りになりたい時もあるよね」

そう言うと、美雪は持ってた傘を郁実の肩にかけた。そして、そのまま踵を返すと小走りに去って行った。郁実を抱きしめる事も、両手で肩を持つことも、手を握ることも、しなかった。雨が傘に当たる「ぎーーーーー」という音だけが、郁実の耳に響いていた。

あれから、五年が経った。

「おかあさん、どーぞ」

「ありがとー」

小さな女の子が、自分で切り分けたロールケーキを美雪に差し出した。切り口は雑で、いびつな形だったが、美雪は笑顔で受け取った。女の子も笑顔になった。

聡と美雪の間に生まれたこの子は、名前を「ちひろ」といった。美雪は、昼の三時になると必ず、ちひろとおやつの時間を楽しむ。ちひろが、ニコニコ顔で母親を見つめた。

「ちひろちゃん、どうしたの？」

「おかあさん、幸せそう」

そう言うのと、「んふふ」と笑った。美雪も「ふふふ」と笑いながらちひろに顔を近づけた。

「幸せよく。お母さん、ちひろちゃんと美味しい紅茶を飲んでる時がものすごく幸せよ」

そう言われて、ちひろも「ふふふ」と顔を近づけるマネをした。

美雪は、ちひろを身ごもつてから、それまで勤めていた職場を退職し、家に入っていた。将来的には復帰も考えてはいるが、しばらくはそのつもりはない。

郁実の身の回りは、変化が多かった。まず、父親が死んだ。はじめから病気もあり、それに加えて日々の多量のアルコールの摂取で、体はボロボロだったらしい。父親が死んでも、郁実は悲しむことはなかった。父親の亡骸を見て、「そうか、死んだか」と一言言っただけだった。葬儀も、簡素に済ませた。母親は参列しなかった。知らせた手紙の返事で、「ここに来る？」という誘いがあったが、郁実は断った。

アクセサリー職人の師匠は、海外へと移住していた。外国で、自分の力を試すためだ。年老いているのに、エネル

ギーにあふれた人だと郁実は思った。

「お前に教えることはもうなんもないよ」

「そうでしょうか。まだまだ教わりたいこともあったんですが……」

「っていうか初めから何も教えてないよ。お前が勝手に学んでたんだよ。だから、お前はもう俺がいなくても大丈夫」  
そして最後に「がはは」と笑った。郁実との最後の会話はこんな感じだった。

そして、自分の店である『フラワーショップいくみ』を開いていた。高校を卒業した後、花屋のバイトに、深夜の工事現場のバイトを加えて資金を貯め、約三年で店を開く事ができた。バイト先だった花屋の店長から、暖簾分けしてもいいという話ももらったのだが、自分の二本の足でしっかりと立って生きていきたいという気持ちから、その話は断った。しかし店を開くにあたっては、何度も相談に乗ってもらった。

そして、その花屋のカウンターには、郁実がデザインしたアクセサリーも並べていた。それは、女性客を中心に、割と人気だった。

「おい花屋！やってくるか！」

店に、元気のいい客がやってきた。見ると、聡だった。

「ああ、聡さん」

「おお、いい感じじゃねえか、店！」

「はい、おかげさまで、割と順調です」

「良かったなあ。アクセサリーも置いてんだな」

「はい、こつちも、割と売れてくれて、ありがたい限りです」

「ちゃんと夢を両方叶えたんだな」

「はい、一応」

そう言って、お互い、「にっ」と笑いあった。

「…で、今日はどうしたんすか？それだけ言いに来たわけじゃないでしょ？」

「おお、そうだ、忘れてた！なあ、これ見てくれよ！」

「なんですか？」

「じゃあ〜ん」

と言つて、聡がカバンの中から雑誌を取り出した。表紙には、「orange peko」と書かれていた。

「オレンジペコー？」

「そう！『オレンジペコー』俺の雑誌だ！」

「え、聡さんの雑誌！？」

「そうなんだよ！ついに雑誌を一冊任せてもらえるようになったんだよ！」

「えーっ！本当ですか！すごいですね！おめでとうございます！」

「ありがとう！ついにだよ。やっつだよ〜」

「見てもいいですか？」

「おう！見てくれよ！」

郁実がパラパラとページをめくった。

「へえ：今までにない感じの男性情報誌っすね」

「そうなんだよ！それを狙ったんだ。男性の情報誌つつたら、色っぽい話題とか、車とかバイクとか、グルメも、がつつりな男メシの紹介ばかりだろ？だから、俺が目指したのは、男性版、女性情報誌よ」

「男性版、女性情報誌」

「そ。グルメも、おしゃれなカフェとか、上品なイタリアンとか。ファッションもキレイな感じのものを紹介してさ」

「へえ〜、いいですね。…あ、このページ、いいなあ」

郁実が見ていたのは、トレーニンング特集だった。

「そう！それもさ、ムキムキのマッチョになるって感じじゃなくて、キレイな、洗練された体を目指す特集にしたの

さ。結構、そういう体に憧れる男って多いだろ？」

「なるほど、いいところに目つけましたね！」

「だろお。これは売れるって、俺は確信してるね！」

「はい、俺も買いますよ」

「ああ、いいよ。それはやる」

「いいんですか？」

「もちろん。ただ、次の号からよろしくたのむよ」

「はい、もちろんです」

そう言っつて、郁実が再び『オレンジペコー』に目を落とした。

「美雪さん、喜んだでしょう」

「んー？」

『オレンジペコー』って、美雪さんの好きな紅茶ですもんね」

そういうと、聡がニヤツと笑っつて、「ああ。俺にとつての、最高の武器だ」と言っつた。

「武器？」

「ああ。家族を守るためのな」

「ああ、昔、言っつてましたね。仕事は武器だっつて」

「ああ。雑誌を持つつのは、俺の夢だっつたからな。だから俺は、このプロジェクトを最優先に動かしつたんだ。早く、安心させつたからな」

「まーでも、ずいぶん時間かかちやつたけどな…」と聡が頭をボリボリとかいた。

「いやいや、すごいですよ」

郁実が笑つた。聡も、「ありがとう」と笑つた。

「この武器を持つつて、俺はあいつらを守り続けるよ」

そう言つた聡の横顔に、男らしさを感じつた。

「すみません」

夕方。郁実が店の前に広げた花に水をやっつてると、高校の制服を着た女の子が話しかけてきた。

この年齢の女の子が店に来るのは割と珍しい。女の子は、学生カバンと、自分の体よりもだいぶ大きい、細長い布の

包みを背負っていた。

「はい、いらつしやい」

女の子が「えっと…」と話し出した。

「あの、お母さんから、明日お墓参りに行くから、そのお花買ってきてって頼まれて。なので、そういうのに合うお花が欲しいんですけど」

「お墓参りですね。わかりました」

「じゃ、お店の方に」と郁実が促した。女の子も「はい」と後に続いた。

「おおっと」

女の子の持っていた細長い布の包みが店の入り口でひっかかりそうになり、郁実が「大丈夫ですか？」と声をかけた。女の子が慎重に店の中に入れ、「ここ、立てかけといてもいいですか？」と聞き、「もちろん、どうぞ」の返事を聞いて、店の壁に包みを立てかけた。

「その、亡くなった方…」と郁実が言うと、「おばあちゃんです」と女の子が答えた。

「おばあちゃんの、好きだった色とか、わかりますか？」

「紫の着物をよく着てました」

「紫ですね。ちなみに、ご予算はどれぐらいで…」

「お母さんから、千円預かってきてます」

「かしこまりました」

そういうと、郁実は椅子を一脚持ってきた。

「今から見繕いますので、少々お待ちください」

「あ、ありがとうございます」と、女の子が椅子に座った。女の子は、背筋をピンと伸ばした、とてもキレイな姿勢だった。郁実は紫の花を中心に、予算にあう内容で花を束ねた。それを待ってる間、女の子はずっと店の花を眺めていた。

「お待たせしました」

郁実が、女の子に小さな花束を持ってきた。女の子がそれを見ると「うわあ」と笑った。

「すっごくキレイですね」

「ありがとうございます」

「でもこれ、千円で足りませんか？」

「はい、もちろん」

「よかったあ」

そう言って、女の子はやわらかく笑った。

「じゃあ、こちらでお会計を…」

と、郁実がカウンターに促した。「あ、はい」と女の子も続いた。

すると、郁実の後ろから「うわあ！」という声が聞こえた。おどろいて振り返ると、女の子が、郁実のつくったアクセサリーを指さして「これ、なんですか!？」と興奮気味に尋ねた。

「これ、自分でつくったやつ、お店に並べてるんですけど…」

「え、自分で作ったんですか!？」

「はい」

「お花屋さんが!？」

「はい」

「すごい!」

さっきまでの礼儀正しい印象と違い、女の子らしくはしゃいで、目がキラキラと輝いていた。

「これ、売ってるんですか!？」

「はい、一応」

「へえ、すごい可愛い」

女の子の言ったその言葉で、昔、師匠に「お前のデザインはキレイすぎる」と言われたのを思い出し、苦笑いした。

「アクセサリー、好きなんですか？」

「はい!すっごく好きなんです!」

「よかったら、つけてみますか？」

「いいんですか!？」

「もちろん」

と、郁実は作った花束をいったん置いた。

「どれですか？」

「この、小さいお花のついたやつ…」

「これですね。どの指ですか？」

「えっと…」

女の子が、自分の両手を前に出して十本の指を眺めた。

「左手の小指…がいいです」

「小指ですね。サイズわかりますか？」

「あ、ちよつと、わかんないです」

「ちよつと、いいですか？」というとき、女の子の左手を取り、小指を握った。そして、「だと…」と指輪を選んだ。

と指輪を渡した。女の子が渡された指輪を小指にはめてみると、ぴったりだった。

「すごーい、わかるんですか？」

「昔、とあるきっかけで出来るようになったんです。大した特技じゃないですけど」

「そんなことないです! すごいですよ!」

「いやいや…」と、郁実は照れくさそうにした。

「これ…すつごいんです」

女の子が指輪をつけた左手を眺めながら言った。郁実が「ありがとうございます」と返した。

「あ!」

と、女の子が嬉しそうにした。

「来週、大好きなアーティストのライブがあるんです! そのライブにつけていくことにします!」

「おお、いいですね、そういうの。俺も嬉しいです。ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそ！」  
と女の子は財布を取り出した。

「あ…」  
女の子は、アクセサリーの値札と自分の財布の中身を見比べると、残念そうな声を出した。

「あの…やっぱり、ごめんなさい。お小遣いが二十日に貰えるので、そしたら、買いに来ます」

「ああ、そう？」

「はい」

郁実がカレンダーを見た。今日は八日だ。ライブは来週。間に合わない。

「ん、いいですよ。持って行っちゃっても」

「ええ!？」

「うん。お小遣いまで待ってたら、ライブに着けていけないじゃないですか。お金は、お小遣いが出てから  
いいですから、今日持って帰って下さい」

「いいんですか!？」

「はい」

そう言って、郁実は笑った。女の子も、笑顔になった。

「私、このままお金払いに来ないかもしれないかもしれませんよ？」

女の子に冗談っぽくそう言われ、郁実は「ははは」と笑った。

「君は、そんなことしませんよ」

「なんでわかるんですか？」

「わざわざお母さんのおつかい引き受けて、お墓参りのお花買いにきて、おばあちゃんの好きな色まで覚えてるよう  
な優しい子が、そんなことしません」

花屋がそう言うと、女の子が「にへっ」と笑った。

「あ、じゃあ…」

と、女の子が一輪百円の赤い花を指さした。

「これ、ください」

「いやいや、無理しないでください」

「いや、欲しいんです！嬉しい日にはお花を買うんです！」

花を買うのに、こんなに素敵な理由は他にないな、と思い、郁実は嬉しくなった。

「ありがとうございます。じゃあ、お包みますので、少々お待ちください」

郁実が、女の子が選んだ赤い花を包んでいる間、女の子はずーっと、指輪をはめた小指を眺めて笑っていた。その笑顔を見て、郁実は幸せな気持ちになった。その時、

「ぎゅるるるるううう…」

突然、女の子のお腹が鳴った。郁実が、思わずそっちに目を向けてしまい、二人の目が合ってしまった。彼女の顔がみるみる赤くなった。

「すいません、お腹すいちゃって…」

女の子が自分のお腹をなでた。郁実が「…あつ」と言い、裏に入ってしまった。

「これ、よかったら食べてください」

郁実が、コンビニのシュークリームを差し出した。

「いえいえ！申し訳ないです！」

「いや、賞味期限今日までなので、良かったら、食べてください」

「…いいんですか？」

「どうぞ」

「じゃあ、いただきます」

女の子がシュークリームをほおばった。幸せそうな顔だった。郁実は「…そうだ」と言い、また、裏に入った。

「あの、よかったら、どうぞ」

郁実が、お盆の上にコーヒ二つと、お茶菓子に乗せて持ってきた。

「えー、うれしい。いいんですか？」

「俺も、コーヒー飲みたかつたんで、付き合ってください」と、郁実がコーヒーをすすった。

「…あ、コーヒー、平気ですか？」

「はい、大好きです」

「それなら、良かった」

女の子が、コーヒーに手を伸ばした。お茶菓子に、ビスケット、チョコレート、マシユマロなど、甘いものがたくさん並んでいた。それを見て「ふふ」と笑った。

「…どうかしましたか？」

「甘いもの、好きなんですか？」

そう言われて、郁実は恥ずかしくなり、「…はい」と小さく答えた。

「ふふふ」と女の子がまた笑った。

「…なんですか？」と郁実も笑った。

「いや、ちよつと意外で」

「…顔に似合わず、的なの？」

「…はい」

二人で笑った。笑いながら「やつぱりね」と郁実が言った。「あ、でもコーヒーは似合いますよ」と女の子も笑いながらフォローした。

コーヒーを飲みながら話していると、だんだんと打ち解けてきた。女の子は、名前を「さやか」といった。

「それ、なに？」

郁実が、さやかか壁に立てかけた細長い布の包みを指さした。

「ああ、弓です」

「ゆみ？」

「部活で、弓道やってて」

「へえ、かつこいい」

これが、彼女の姿勢の良さと、礼儀正しさの正体だと気づいた。

「弓道の弓ってそんなに大きいんだね」

「二メートル二十センチあります」

「持ち運ぶのも大変そうだね」

「はい、電車とか、本当に気を付けないと」

「あ、満員だったら最悪だね！」

「そうなんですよ！」とさやかかか郁実の顔を指さして笑った。郁実も笑った。

「お花屋さんは、何かやってなかったんですか？」

「スポーツ？」

「はい。格闘技とか、イメージ的にはそんな感じですけど」

「いや、スポーツは何も。高校の頃は、花屋のバイトと、アクセサリー習いに行ってたから」

「そう、ですか…」

さやかは、郁実の捲った袖から出ている左腕に見えた傷跡が気になっていた。あの位置に一つや二つでなく、複数のキズがつくのは、格闘技でもやっていたのだろうと予想していたからだ。しかし、そうではないと言われ、わからなくなつた。「不良だったのか？」という思いが頭をかすめたが、「不良が花屋でバイト…？」となり、頭の中に『？』がたくさん浮かんだ。

「どうかした？」

「はい？」

「いや、なんか、すごく険しい顔してたから」

「ああ、いや、なんでもないです」とさやかかか笑ってごまかし、郁実も「面白い子だなあ」と笑った。

「すみません、長居しちゃって」

さやかが荷物を持ち、立ち上がった。外は、すっかり暗くなっていた。

「いやいや、俺も楽しかったから。また、時間ができたらおいで」

「いいんですか？」

「うん。コーヒー淹れて待つてるよ」

そう言うと、さやかが「はい！楽しみにしてます！」と笑った。

「それじゃ、またね。気を付けて帰るんだよ」

「はい、ごちそうさまでした」

郁実が手を振ると、さやかは頭を下げてあいさつした。

次の日の夕方。美雪が、郁実の店の前をたまたま通りかかった。

「あら？」

すると、店の前をうろろするさやかを見つけた。さやかは、店の中の様子を伺い、少し、困っているようにも見え

た。

「こんにちは」  
美雪がさやかに話しかけた。さやかは「あ、こんにちは…」とお辞儀をした。

「お店に用事？」

「お店っていうか、お花屋さんに、ちよつと…。なんですけど、今日お休みみたいで…」  
店には「closed」の札がかかっていた。

「ちよつと待ってね」と、美雪が店の中を覗いた。

「…多分ね、配達に行ってるんだと思う」

「配達？でも、お休みって…」

「あの子、ちよつと遠めの配達は、休みの日に行くのよ。時間かかっちゃうから」  
「…でも、それじゃ、お休みにならないんじゃない？」

美雪が、「でしよー？」とさやかを指さした。

「私もね、そう言ったのよ。『休みの日はちゃんと休みなさい』って。なのにあの子、『花は急に必要になるときがあ  
るから、あんまり店を閉める日を増やしたくない』って、バカよねー」  
さやかは「あの子」という言い方が気になった。

「あの子？」

「ああ、あの子が君ぐらいの年の時からの知り合いだから、つい『あの子』って呼んじやうのよ」

「そういえば、おかしいわね」と美雪が笑った。あのイカツくて強そうな花屋が『あの子』と呼ばれている事がおか  
しく、さやかも笑った。

「で、用事ってどんなのかしら？急ぎなら、私が伝えてもいいけど…」

「あ、お礼が言いたくて…」

「お礼？」

「はい。この指輪のことをお礼言いたくて」

「指輪…あら、あの子が作ったやつじゃない」

さやかが指輪の代金を待っていてくれていることを説明した。

「あ、そうなの。あの子らしいわねー。お金払いに来なかったらどうするのよ」

「はい、私もそう言ったんですけど、『君はそんなことしないから』って」

「言いそうだな」と、美雪が笑った。

「なので、お礼持ってきたんです。お花屋さん、甘いものが好きだって言ってたので…。迷惑でなければ、渡しても  
らってもいいですか？」

「そっか…」と美雪が、一度手を伸ばしかけて、ひっこめた。

「それ、腐る？」

「いえ…、クッキーなので、日持ちはします」

「じゃあ、面倒でなければ、直接渡してあげてくれる？その方があの子、喜ぶと思うから」

「はい、そうします。私も、直接お礼言いたいですし」

「うん。そうしてあげて」

そう言って笑った美雪を見て、さやかは「きれいな人だな」と思った。そう思っていたら、美雪が、「…ねえ？」と、時計を見ながら言った。

「はい？」

「ちよつと、時間ある？」

「はい、ありますけど…」

「多分、あの子そろそろ帰ってくると思うのよ。良かったら、一緒にお茶でもしながら待たない？もちろん、ごちそうするから」

美雪に誘われて、さやかは嬉しかった。

「え、いいんですか？」

「もちろん。娘も、おじいちゃんとおばあちゃんに預けてるから安心だし。それに、ちよつと、興味あるのよ。若い子から、あの子がどういう風に見えるのか」

「私も、聞きたいです！あの人のお話とか！」

「いいわね。じゃあ、行きましようか」

そう言って、二人で近くのファミレスに入った。ファミレスに向かう道すがら、お互いに自己紹介をした。さやかは、「美雪」という名前を聞いて、似合ってるなと思った。

「いっぱい食べる」

「どんな人なんですか？」とさやかに聞かれて、美雪が最初にこう言った。二人は、ガラス窓から花屋が見える席に座り、美雪はチーズケーキと紅茶を、さやかはチョコレートパフェとコーヒーを注文し、花屋の様子をうかがっていた。

「いっぱい？」

「うん。とにかく、いっぱい食べる」

「どれぐらい…」

「うん、マンガかなってぐらい」

「…孫悟空」

「…そうね。実写版よ」

さやかはクッキーをもっと買ってあげばよかったと後悔した。

「その指輪、可愛いわね」

美雪がさやかの小指を指さした。

「はい、ものすごく可愛くて、一目で気に入って！」

「ね、あの子のアクセサリーって、キレイで可愛いわよね」

「はい！あの子の見た目からは想像できないぐらい」

二人で、「ふふふ」と笑った。

「これも、あの子が作ったのよ」

美雪が左手を出した。

「これって、結婚指輪ですか？」

「そう。あの子、私の指を握っただけでサイズわかっちゃうのよ」

「あ…」

さやかは、これが花屋があの時言っていた「あるきっかけ」だとわかった。

「あの人って優しいですよね」

「うん、優しいわね。優しいしね、強いよ」

「強い…」ときやかがつぶやいたのと同時に、美雪が話し出した。

「あの子の左腕に、傷跡があったのは気付いた？」

ずっと気になっていた話題が出てきて、さやかはすぐに食いついた。

「あの、ナイフで切られたみたいなの…」

「そう。あの傷」

「正直、すごく気になってたんです。あの…」

「うん？」

「もしかして、昔、不良だったとか…？」

さやかが美雪の目を覗き込んだ。美雪は、「あっはっは！」と笑って右手を横に振った。

「ないない。あの子が不良だなんてない」

「ですよ。そういう感じじゃないですもんね」 さやかは、心の底から安心した。

「うん。あの傷はね、私を守ってくれたの」

「え？」

美雪が、あの事件の事をさやかに話した。さやかは「へえー、すごい」と目を丸くした。

「血だらけになってる腕を見て私は驚いてただけど、あの子は平然と『大丈夫ですよ』って」

「本当に強いんだ、お花屋さん」

「うん、ものすごく強いわ、あの子は」

「…確かに、あの人の泣いたところとか、想像できないかもですね」

「あー…うん、そうね。泣かないわね」

「一回、面白い事言ってた時があつてね、」と美雪が話し出した。さやかが、「はい」と話を促した。

「昔、そういう話になって、その時に私が『そうよね、男は、人に涙は見せないわよね』って言ったの。そしたらね、

あの子、『それは違う』って」

「違うんですか」

「そうなの。あの子いわく、『人に涙を見せないってことは、独りで泣くってこと。独りで泣くってことは、自らに涙を許すって事。男はそんなことしちやいけな』って。

「うわあ、お花屋さんっぽいですね」

「うん。だから、『じゃあ、男はいつ泣くの？』って聞いたたら、その返事が面白くてね」

「はい」

『自分より強い男の人か、優しい女の人に、泣いていいよって言われた時だ』って」

「へえ、なるほど」

「ね、面白いでしょ」

「はい」と、さやかは笑った。

「一度、あの子がものすごく落ち込んだことがあったのね」

「お花屋さんでも落ち込むんですか」

「うん。でもね、それでもあの子は泣かなかった。決して自分では涙を許さないのよ。本当に強いわ」

「…孫悟空」

「…そうね、実写版よ」

そう言つて、二人で笑った。

「…美雪さんは、言わなかったんですか？」

「え？」

「その、お花屋さんが落ち込んだ時。『泣いていいよ』って」

「…私は、優しくもないもの」

そういえば、あの、雨の日の空き地での話は、あれから一度もしていないな、と美雪は思った。あの日から一週間程、なぜか郁実と顔を合わさなかった。朝の駅へ向かう道でも、郁実の姿は見なかった。その後、しばらくして郁実と話した時には、いつもと何も変わらない郁実だった。落ち込んでいるような雰囲気などなかった。その郁実を見て、「やっぱ強い子だ」と思ったのを覚えている。しかし、あの日のことは、心に深く、残っていた。そんなことを考えながら、美雪が紅茶をすすった。その仕草も、さやかには美しく見えた。

「なんでそんなに強いんですかね、お花屋さん」

「ん？ん…私の旦那が、まだ彼氏だったころ、あの子が言つてたらしいんだけどね」

「はい」

『強くないと、自分の平穏を守れない』って言つてたらしいわ」

「平穏」

「うん。まあ、ちよつと、育つた家が普通の家じゃなかったのよ」

「はあ…」

「詳しくは知らないんだけど、あの子のお父さんは病気のある人だったの」

「病気ですか…」

「うん。詳しくは知らないんだけど、心の病気だったらしくてね、働きもしないでお酒ばかり飲んでたみたい」

「へえ…」

「お父さんは、あの子が高校を卒業するぐらいの時期に亡くなっちゃったんだけどね」

「そうなんですか…」

「でもやっぱり、あのお父さんと二人で暮らすのは、辛かったのかもね」

「二人で？」

「うん。あの子のお母さんは、あの子が中学生の頃に、妹さん連れて実家のある田舎に帰っちゃったの」

「そうなんですか…。お花屋さんについて行かなかったんですか？」

「うん、詳しくは知らないんだけど、事情があつてついて行けなかつたみたい」

「事情…」

「うん。詳しくは知らないんだけどね。でもあの子は、自分で『ついて行かなかつた』って言つてたわ。お母さんに『負担かけたくない』って」

「お花屋さんらしいですね」

「うん、詳しくは知らないんだけど…」

と言つたところで、美雪の言葉が止まつた。さやかが美雪の目を見た。

「いや、私、あの子に関しては全部、『詳しくは知らない』なあと思つて」

そう言つて美雪が微笑んだ。少し、寂しげな笑顔だった。

「おかわり、いらない？」

「え、いいんですか？」

「いいわよ。コーヒー？紅茶？」

「じゃあ、イチゴパフェ…」

おずおずとそう言うさやかを見て、なんだこの可愛い生き物は、と思った。

「甘い、好きなの？」

「…はい。こないだも、お花屋さんでたくさん食べちゃいました」

「あの子のところまで？」

「はい。コーヒー出してくれて」

「へえ。『またおいで』って言ってなかった？」

「言ってくれました。お花屋さん」

「それ、遠慮しないで、本当に行つてあげて」

「…いいんですかね？」

「うん。多分、ものすごく喜ぶと思う」

「じゃあ、遠慮しないでまた遊びに行きます」

「うん、そうしてあげて」

「…あ、帰つてきたみたい」

花屋の駐車場に一台のバンが現れ、中から郁実が出てきた。

「…あ、ほんとですわね」

「良かったわね、待つてて」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、行きましようか」

「はい」

二人でファミレスを出て、花屋に向かった。

「郁実ー!!」

美雪が郁実を呼んだ。郁実が振り返り、「あー、美雪さん!」と言ったところで、さやかもいることに気づき、その組み合わせに「ん?」という表情をした。その表情に、美雪とさやかが顔を合わせて笑った。

「…え、知り合いですか?」

「さつき仲良くなったのよねー」美雪が笑顔でそう言い、さやかも「はい」と笑顔で返した。郁実も「へえ」と笑った。

「あの、お花屋さん」

「ん?」

「これ、受け取ってください。指輪のお礼です」

さやかがクッキーの入った袋を渡した。郁実が「ありやりや、気にしなくていいのに」と言ったあと、「でも、ありがとう。ありがたくもらっとくね」と受け取った。美雪が「それ渡すために待っててくれたのよ」と言った。

「そうなんだ、待たせちゃってごめんね。ありがとう」

「あの、クッキーなんです」

「ほんと?やったあ」

「確か、十八枚入りだったと思うんですけど」

「うん」

「足りませんか?」

「うん?」

美雪が、大きな声で笑った。郁実は「何か余計な事吹き込んだな」と思った。

さやかは、帰り道に古本屋に寄り、「ドラゴンボール」を十六冊買って帰った。

「実写版かあ…」

家に帰り、ご飯を食べてお風呂に入った後、布団にもぐりこんだ。枕元に、買ってきた「ドラゴンボール」を積み上げて、一巻から読み始めた。孫悟空には、たくさん仲間がいた。しかし、その仲間の中で、悟空の生い立ちや、戦

いの中での気持ちの変化を、詳しく知っている仲間も、どれだけいるのだろうかと思った。

悟空は、山に捨てられていたところを、一人のおじいさんに拾われ、育てられた。物語の途中、そのおじいさんの幽霊と出会い、涙を流す姿があった。だが、仲間たちはその涙は知らない。仲間たちが知ってるのは、強く、たくましい悟空だけだ。

『オラ、もつと強くなりてえ』

孫悟空は、しきりにこの言葉を言っている。そして、強い敵と闘う度に『ワクワクすっぞ』と言う。しかし、お花屋さんには『強くなりたい』と思ったことがあるのだろうか。悟空のように、戦う事を楽しいと感じ、『強さ』そのものを求めた事があつたのだろうか。

「自分が強くなければ、自分の平穏を守れない」

お花屋さんにとつて戦いは、孫悟空のように楽しいものではなく、辛く、苦しいものだったのでないだろうか。

『強くなりたい』かあ…」

そう呟いて、「ドラゴンボール」を積み上げていた山に手を伸ばした。…が、次の一冊がなかった。

「…ない！」

「ドラゴンボール」の十六巻は、ボロボロになって倒れている孫悟空に、ピッコロ大魔王が上空から攻撃を放つているところで終わっていた。

「もう、いいところなのに…！」

明日は続きを買って来ようと決め、さやかは眠りについた。

「こんにちはー」

「こんにちは」

郁実の花屋に、美雪とちひろが来た。ちひろは、スケッチブックとクレヨンを持っていた。

「あ、いらつしやいませ」

「いらつしやい」とちひろに微笑みかけた。

「どうしたんですか？」

「ちよっとね、お願いがあるの」

「お願い？」

「ほら」と美雪がちひろの背中を両手で軽く押した。

「お花屋さん、お花見せてください」

ちひろが礼儀正しく言った。

「お花が見たいの？」

「うん！」

「あのね、この子、絵を描くのが好きなの。それで今度、『こども絵画コンクール』に出してみようと思って。それ、なに描きたいか聞いたら、『お花屋さんのお花が描きたい』って言うのよ、いいかしら？」

「えー、本当ですか！」

花屋の郁実には、ものすごく嬉しい話だった。

「ちひろちゃん、お花の絵描いてくれるの？」

「うん！いいですか？」

「もちろん！どんなお花がいい？」

郁実がちひろの視線までがんだ。

「お花畑！」

「お花畑？」

「お花畑！」と、ちひろが両手を広げた。ちひろの両手の先には、店の前に広げたくさんの鉢植えの花があった。小さな女の子は、これを「お花畑」と表わした。大人二人は「なるほどなあ」と思った。

郁実が小さい椅子を持ってきて、そこに座ってちひろが絵を描き始めた。美雪がその隣でちひろを見守り、郁実は、店の中から様子をうかがっていた。ちひろは、ものすごい集中力で黙々と絵を描いた。花屋に客が来ても、そつちに気を取られることなく、小さな手を動かし続けた。

途中、さやかがお花屋にきた。ちひろの隣にいる美雪を見つけ、笑顔で会釈をすると、美雪も笑顔で手を振った。「あれ、美雪さんの娘さんですか？」

「うん、そう。ちひろちゃん」

「へー、かわいい」

「うん。美男美女カップルの子だからね」

「旦那さん、カッコイイんですか？」

「うん。めちゃくちゃ爽やかでハンサム。背高いし」

「多分、その弓と同じぐらい」と、郁実がさやかかの弓を指さした。

「いや、それは言い過ぎでしょう」とさやかか笑った。

「ははは、それは言い過ぎだけど、弓より：四十センチ低いぐらいじゃないかなあ？」

「へえ。羨ましいですか？」

と、さやかか弓を手に持ち、ニヤニヤしながら郁実と弓を交互に見た。

「やめる、測るな。俺の身長を測るな」

二人が笑った。

「ちひろちゃん、お花の絵描いてるんですか？」

「そう。コンクールに出すんだって」

「すぐく集中して描いてますね」

「ね。絵描くの、よっぽど好きなんだろうなあ」

郁実がコーヒーをさやかかの前に置いた。

「あ、ありがとうございます」

「…あの二人も飲むかな？」

「持って行きましょうか？」

「うん、お願い」

郁実が紅茶とホットミルクを置いたお盆をさやかに渡した。お盆を運ぶさやかに、郁実が椅子をもう一脚持って続いた。美雪が小声で「ありがとう」と言いながらさやかかからお盆を受け取ると、郁実が「ここ置いてください」とイスを美雪の隣に置いた。郁実とさやかか、ちひろの背中から絵をそっと覗きこんで見た。

「うわ！」

「すごい！上手！」

ちひろの絵はものすごく上手だった。それまで小声で話していたのに、思わず大きな声を出してしまう程だった。色とりどりのお花畑は、繊細に、かつ、いきいきと描かれていた。二人の声に、ちひろが「えへへ」と笑顔で振り向いた。天使の笑顔だった。「もう完成？」とさやかが聞くと、「もうちよつとー」とちひろが絵に向き直り、真剣な顔になった。その様子を見て、郁実が「何かあったら言ってください」と美雪に小声で言い、さやかと店の中に入った。

「できたー」

「できた？」

美雪が絵を覗き込み、「上手に描けたわねー」と褒めた。親のひいき目なしに、上手だと思った。ちひろは「えへへ」と照れくさそうに笑った。

「お花屋さんに見せに行こっか」

「うん！」

二人で店の中に入ると、ちひろは「はい！」と、郁実ではなく、さやかに絵を渡した。「見せてくれるの？」とさやかが受け取ると「うん。えへへ」と照れくさそうに笑った。

「これ、ありがとね」と美雪がお盆を郁実に渡した。

「もう一杯どうですか？」

「うん。いたたくわ」

郁実がコーヒーを二人分、紅茶を一人分淹れ、ミルクを温め直した。ちひろは、さやかにピツタリくつついて「ここ、きれいだね」「ここ、上手だね」と褒められる度に「えへへ」と嬉しそうに体をくねらせていた。

美雪が、紅茶を一口すすった。

「やっぱり、オレンジペコーは美味しいわ」

そう言つて、微笑んだ。

「それは、良かったです」

郁実も、コーヒーをひと口飲んだ。

「郁実は飲まないの？」

「オレンジペコーですか？うん…やっぱり、コーヒー飲んじゃいますね」

「こんなに美味しいのに」

美雪がカップを両手で持ち、「ふ」と息を吹きかけた。美雪の手の中で、琥珀色の波がキラキラと輝いた。

郁実が「…あ、そういえば」と声を出した。

「オレンジペコーって、本当は味の名前じゃないって知ってました？」

美雪が「…そうなの？」と返した。その返事に満足しながら「そうなんですって」と返事をした。

「…でも、私いつも『オレンジペコー』って名前の紅茶買ってるわよ？」

「これですよね？」と郁実が、紅茶のパッケージを持ってきた。美雪のお気に入りブランドのものだ。

「そうそう、これこれ。ほら、『オレンジペコー』って書いてあるじゃない」

「そうなんですけど、本当はお茶の葉の、等級の名前らしいです」

「等級？」

「等級って言っても、決してどれが価値が上で、どれが下とかではなくて…」

「えっと…」と郁実が手帳を取り出した。それを、美雪も覗き込もうとしたので、郁実は手帳を開いてカウンターの前に置いた。手帳の見開きページが、細かい説明文や手書きの葉っぱの絵、何かの図などで真っ黒に埋まっていた。

「まず、お茶の葉のサイズで、大きい順に、フルリーフ、ブロークン、フアニングスの三つに分かれてて…」

「ふんふん」

「オレンジペコーはフルリーフをさらに細かく、葉の若さで分けた分類の一つみたいですね」

「…簡単に言うと、オレンジペコーは葉の形の名前って事かしら？」

「一言で言うなら、そんな感じですね」

「へえ、味の名前じゃなかったんだ」

「本来は、そうみたいです。でも、このブランドみたいに『オレンジペコー』って名前で売ってるブランドもあって、その場合、それはセイロンティーのブレンド茶である事が多いんですって」

美雪が「へえ〜」と感心した。

「よく知ってるのね」

「いやいや、知りませんでしたよ、何も。こないだ、紅茶屋さんに行って教えてもらいました」

「教えてもらったの？わざわざ？紅茶屋さんに行つて？」

美雪が、からかうように笑いながら郁実の目を見た。

「いや、わざわざっていうか、お茶の葉買うときについてに教えてもらっただけで…」

「でも、自分じゃ飲まないのよね？」

「いや、それは、そうですけど…」

そう照れくさそうにする郁実を見て、美雪は「なんだか懐かしいな、この感じ」と思っていた。

「それ、ちよつと写メらせて」と、美雪がスマホを構え、郁実が手帳を美雪の見やすい位置に動かした。カシャツ。

写真を撮り終わると、美雪が手帳をまじまじと見た。

「へえ、オレンジペコーはまだ若い葉なのね」

「そうみたいですわね」

茶葉は、若い順に、オレンジペコー、ペコー、ペコスーチョン、スーチョンと名前がついていた。「なんでどれも、響きの可愛い名前なのかしら」と美雪が笑った。郁実も「ですわね」と微笑んだ。

「…あれ？」

郁実が店内を見回した。美雪も「ん？」と郁実の視線を追いかけた。

「オレンジペコーとペコーがないです」

ちひろとさやか的事だ。美雪も、「本当ね」とあたりを見回し、そのあと、外を覗き込んだ。

「あ、いたいた」

「ん？」

郁実も外を見ると、ちひろとさやかがお花畑の周りを走り回って遊んでいた。

「なんか、懐いてますね」

「ね。嬉しいんだと思う」

「です。楽しそうです」

「兄弟いないからねー。お姉ちゃんみたいに思ってるんじゃないかしら」

「お姉ちゃんか」郁実がつぶやいた。

「俺にとつての美雪さんみたいな感じですかね？」

美雪が、「ははっ」と笑った。その笑顔のまま、郁実の目を見た。

「郁実にとつての私は、さやかちゃんにとつての郁実だと思うわよ？」

「ええ？」

「うーん…」と郁実が腕を組んだ。

「いや、ちよつと違うんじゃないですかね」

「ふふふ」と美雪が笑った。

「いや、多分、ほとんど一緒よ」

そう言う郁実の頭を、美雪がぺしつと叩いた。

「いった！何で叩くんですか！」

そう言う郁実を無視して、美雪は「ちひろ、帰るよー」と、外のちひろを呼んだ。ちひろが「はい」と返事をし、

さやかと手をつないで美雪の元へ来た。

「さやかちゃん、ありがとね」

美雪が、さやかの手からちひろの手を受け取った。

「いえいえ。ちひろちゃん、またね」

「おねーちゃん、また会える？」

「うん。また遊ば」

「ばいばーい！」

ちひろは、美雪に手を引かれながら、何度もさやかに手を振った。さやかも、見えなくなるまで手を振り返した。

「今日、ごめんね。大変じゃなかった？」

郁実がコーヒーを出した。

「全然。私も楽しかったです。ちひろちゃん、いい子だから大変な事なんて何もなかったですよ」

「ありがとうございます」とさやかがコーヒーをすすった。

「それなら良かった。なんか、よつぽど嬉しかったみたいでさ。あんなにはしゃいでるの初めて見たよ」

「うれしい？」

「うん。一人っ子だから、お姉ちゃんが出来て嬉しかったんじゃないかって美雪さんが言ってた」

「それは、私も同じですよ」

「同じ？」

「私にとっては、美雪さんがお姉ちゃんで、ちひろちゃんは妹です」

「じゃあ、さやかちゃんは次女だね」

「です」とさやかが笑った。

「おばあちゃんが褒美くれたのかなあ…」

「ん？」

「私、昔から女兄弟が欲しくて。お兄ちゃんはいるんですけど、一個しか違うないから、友達みたいな感じだし。

やっぱり、姉でも妹でもいいから、女の兄弟が欲しくて。親にずっと、『お姉ちゃんか妹くれ』って言ってたんです」

「ご両親、困っただろうなあ」

「はい、困りながら、『無理だ』って言われました。だから、親が無理ならって思って、おばあちゃんにも言ったんです。『お姉ちゃんか妹くれ』って」

「もっと困っただろうなあ」

「ところが、これがそうでもなくて。おばあちゃんはニツコリ笑って『いい子にしてたら、きっとできるよ』って」

「へえ」

「それで、おばあちゃんのためのお花買いにきたら、本当にできました。しかも、お姉ちゃんと妹の両方」

「そうだね。いい子にして良かったね」

「これは、おばあちゃんからのご褒美です」

「優しいおばあちゃんだね」

「郁実さんのお花が気に入ったんだと思います」

「だったら、嬉しいなあ」

「郁実さんのおかげです」

「いやいや、お花の力が偉大なんだよ」

「じゃあ、お花にも感謝です」

さやかが、店の中の花たちに手を合わせた。その仕草に、郁実が笑った。

「このお花はドラゴンボールですね」

「ん？」

「願いを叶えてくれる、ドラゴンボール」

郁実が「ははは」と笑った。

「それじゃあ、おばあちゃんは神龍だ」

「ほんとだ」

さやかも笑った。

「さやかちゃん、『ドラゴンボール』知ってるんだね」

「最近、読んでるんです」

「へえ。俺も、子供のとき夢中になったなあ。今でも好きだけど」

「私も、お兄ちゃんとアニメ見てたんで、チラツとは知ってたんですけど、小さい頃だから記憶があいまいで。だから、改めてちゃんと読んでみようと思って」

「うん。あれはいいマンガだよ」

「…あの、」

「ん？」

「郁実さんは、『強くなりたい』って思ったことがありますか？」

「悟空みたいに？」

「はい」

「…ないなあ」

さやかか「ですよね」と答えた。

「俺は、優しくなりたいなあ」

その一言に、さやかは驚いた。

「もう、優しいじゃないですか」

その一言に、郁実は「へへ」と嬉しそうにした。

「ありがとう。でもね、俺は優しくなんかないんだよ」

そう話す郁実の目に、さやかは、何か影のようなものを感じた。

「オラ、優しくなりてえ」と、郁実が悟空の口調をマネして言った。さやかか「ははは」と笑った。

「さすが、実写版です」

「実写版？」

「美雪さんが言っていました。『あの子は、孫悟空の実写版だ』って」

「なんで？」

さやかか、笑いを堪えてニヤニヤした顔になった。

「…よく食べるから」

そう言うさやかを見て、あの時の「足りますか？」の言葉と、美雪の笑い声の意味がわかった。

「余計な事言いやがって」そう言って笑う郁実が、さやかには、なんだか嬉しそうに見えた。

「郁実さんにとって、美雪さんは…？」

「うん？」

「どんな存在ですか？」

郁実が一度「うん」と言葉を置いた。

「さやかちゃんと一緒だよ。お姉ちゃん」

「お姉ちゃんですか」

「うん。そう。お姉ちゃん」

そういう郁実は、少し恥ずかしそうな、照れくさそうな、そんな顔をしていた。その郁実に、「じゃあ、私にとつての郁実さんと同じですね」と返した。美雪に言われた事と同じ事を言われ、郁実は驚いた。

「お兄ちゃんって事？」

「まあ、そんな感じですよ」

「うーん、でもねえ。多分、俺にとつての美雪さんとは、ちよつと違うんだよ」

その時、さやかの口元がちよつと笑った気がした。

「…いや、やっぱり、同じですよ」

「いや、うーん…？」

「なんて説明したらいいんだろう」と、考えている郁実に、「お花屋さん」とさやかが声をかけた。思わず「はい」と返事をした。

「これ、売ってください」

指さしたのは、一輪百円の赤い花だった。

「もちろんいいけど…どうしてまた？」

「ふふふ、嬉しい日には、お花を買うんです」

郁実が赤い花を包み、それを受け取ると、さやかは「じゃあ、帰りますね」と言った。

「うん。またいつでもおいで。可愛い妹にも会えるかもしれないし」

「はい、楽しみにしてます」

手を振る郁実に、さやかは買ったばかりの赤い花を持ち上げて挨拶した。

「あ~~~~~」

「なんですか、急に！店に来るなりうなだれて！」

聡が、郁実の花屋を訪れるなり、レジカウンターに突っ伏して謎の声を出した。

「お客さんいらっしやってるんだから、シヤキツとしてください」

店では、二人組の女性が花を選んでいった。店に時々来る二人組で、季節ごとに、鉢植えを買っていくのが定番だった。女性たちが聡を気にしたので、郁実が「どうぞ、ごゆっくり選んでください」と笑顔で言った。

「ネタがねえんだよ~~~~~」

「はい？ネタ？」

『『オレンジペペコー』に載せるネタがねえんだよ~~~~~』

「ああ、それでうなだれてるんですか」

「そうなんだよ、もう締め切り近いのによ~~~~~」

そこで女性二人がレジカウンターにやってきた。同じ種類の色違いの花を、それぞれが持っていた。郁実が店員の顔になり対応した。郁実が鉢植えを袋に入れていた間、女性二人は郁実の作ったアクセサリーを見て盛り上がった。

「ありがとうございます」

郁実が女性二人を見送ると、入れ違いでまた女性が入ってきた。

「お前の店、女性ばっかだな」

聡が言った。体勢は相変わらず、カウンターに突っ伏したままだ。

「そりゃ、花屋ですから。男性が来ることは珍しいですよ」

「まあ、男が花屋には入りづらいわな~~~~~」

「別に、こつちが入りづらくしてるわけじゃないんですけどね」

「……ん？」

聡が体勢を起こした。

「これだ！」

「はい！？」

「花屋だ！男性向けの花屋を特集するんだ！花の買い方とか選び方、シチュエーションに合わせたプレゼント用の花とか！」

「…ああ、なるほど！」

「ああ、なんで気づかなかったんだろ！こんなに近くに花屋がいたのに！」

「そういえばそうだなあ」と郁実も思った。

「お前さ、知り合いで男がやってる花屋知らない？」

「…まあ、いくつかは知ってますけど…。どうするんですか？」

「いやな、どうしても、店員が女性だと入りづらいんだよ。ちょっと恥ずかしいってのもあるし。でも男性が店員なら入りやすい。だから、男性が店員の、男でも入りやすい花屋を紹介するんだ」

「あく、それいいかもしれないですね！」

「よし、じゃあ、まずはお前、頼むわ！」

「俺ですか？」

「あ、嫌なら無理にとは言わないけど…」

「いやいや、もちろん、OKですよ！むしろ、ありがたいです」

「じゃあ、次来るときに、質問内容まとめておくよ！その時はよろしくな！」

「はい、お待ちしております」

聡は、意気揚々と帰って行った。郁実も、聡の仕事に力を貸せることが嬉しかった。

郁実は、本屋に来ていた。『オレンジペコー』の発売日だ。

「…あれ」

しかし、探しても見つからなかった。

「休刊なのかな…」

そう思い、近くにいた若い女性の店員さんに声をかけた。

「すいません」

「はい、いらっしやいませ」

「今日、『オレンジペコー』の発売日だと思っただけですけど…」

「あー、あれ、もう入ってこないんですよー」

「え？」

「私も、結構好きだったんで、残念なんです。あの雑誌、男性誌だけど、女性にとっても嬉しい情報が多くて」

「…この店では扱いをやめちゃうってことですか？」

「ああ、いえ、なんか、廃刊になっちゃったみたいで」

「廃刊!？」

「はい、うちでは割と売れてたんですけどねー」

「売れてたのに、廃刊ですか…」

「んー、固定ファンはいたみたいなんですけど、あんまり、広がらなかったみたいですね…」

「そうですね…。ありがとうございます」

「はい」と、女性は笑顔でお辞儀をした。郁実も、それにお辞儀で返した。礼儀正しくて、素敵な店員さんだと思った。あんな人がファンだったことは、聡にとっても嬉しいことだっただろう。しかし。

「廃刊か…」

あの日、嬉しそうに報告に来た聡の顔が浮かんだ。

「…あ」

「あ、聡さん…」

本屋からの帰り道、目の前に聡がいた。郁実は、「なんてタイミングだ」と思った。聡の目に、郁実の手にある本屋の紙袋が見えた。

「…本屋行ってたのか」

「…はい」

「…そうなんだ、廃刊になっちゃった」

「あ、いや…」

「へへへ。丸腰になっちゃったよ」

聡が頭をボリボリとかいた。

「…大丈夫ですよ。また、新しい武器が手に入ります」

「…だといんだけどな」

そう言った聡の目は、少し涙ぐんでいた。

「ごめんな。店、紹介してやれなくて」最後にそう言うと、聡は立ち去ってしまった。郁実は、かける言葉がみつからず、「あ、いえ…」と聡を見送った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

家に帰った聡を、ちひろが玄関まで走り、出迎えた。聡は「うん」と答えると、ちひろの横を通り過ぎ、さっさと自分の部屋に入ってしまった。その聡の様子に、ちひろは悲しくなってしまう、美雪の元へ行き、無言で抱き着いた。

美雪は、そっと抱きしめると、頭を優しく撫でた。

最近の聡の様子は、ずっとこんな感じだった。家族に八つ当たりをするような事はなかったが、会話は最低限のものしかなく、暗い雰囲気を漂わせ、静かで、イライラしていた。美雪は、はじめは聡の気持ちを汲んでそっとしておいたのだが、次第に、聡を心配するちひろが可哀想になってきてしまった。

「…変わらないわね」

美雪が、スーツから着替えている聡に声をかけた。聡は、チラッと美雪を見たが、すぐに視線をクローゼットに戻してしまった。

「なにが？」

「弱いわ。あなたは昔っから何も変わらない。弱いままよ」

美雪が聡をにらみつけた。聡は、「弱いままよ」の一言が体中に響くのと同時に、はらわたが煮えくり返る思いがし、ジャケットをかけたハンガーを「ガチャン！」と音を立ててラックにかけた。そして、何かを言い返そうと美雪を見た。だが、美雪がそれを遮るように、すぐに言葉を続けた。

「仕事が一個ダメになったぐらいで、何をそんなにイラついてるのよ。それで家族に心配かけて、ちひろにまで悲しい顔させて。あなたの仕事ってなんなのよ。自分の生きがい？自分のためのものなの？違うでしょ？家族を守るためのものでしょ？言ってたわよね？家族を守るための武器だって。でもね、その武器がどんなに強くてもね、使う人間が弱ければ意味がないのよ」

「武器にばかり頼ってんじゃないわよ、みっともない」

美雪が、そう言い捨てた。「みっともない」の言葉に、聡は、怒りよりも悲しみがこみあげてきた。聡の悲しい目を、美雪も見てしまった。美雪は思わず目をそらした。美雪に目をそらされた聡は、「…そうか」とだけ言い、美雪の横をすりぬけ、家を出て行ってしまった。

「ほら、逃げる。やっぱり、弱いじゃない」

美雪は、ひとりですづやいた。

「あ、いらっしやいませ」

郁実の花屋を訪れた客は、美雪だった。

「こんにちは」

「どうしたんですか？」

「いや、明日ね…」

「明日？」

「…こないだ、ここでちひろがお花の絵を描かせてもらったでしょ？」

「ああ、はい」

「その絵が、コンクールで入選したのよ」

「え！？すごいじゃないですか！おめでとうございます！」

「確かに上手だったもんなあ」と郁実が感心した。

「そう、だから、明日、それのお祝いしようかと思って」

「いいですね。花束ですか？」

「ん、そんなに大きいものじゃなくていいわ。ブーケぐらいの」

「わかりました。作りますね」

「ちひろちゃんの好きな色はピンクだったな…」と郁実が頭の中で考え始めた。

「ああ、いや、今じゃなくていいわ」

「え？」

「明日、うちまで届けてくれない？」

「…ええ、いいですけど」

ちよっと、不思議に思った。花束ならわかるが、小さいブーケなら、今持ち帰っても問題ない。そう思っていると、美雪が「それで、そのままパーティに参加してくれない？」と言った。ますますわからなかった。

「それはいいですけど…。邪魔じゃありません？せっかくだから、家族水いらずの方が」

「いいの」

美雪が、「それ以上聞くな」と言わんばかりに語気を強めた。

「いいの。あの人、帰ってこないから」

「…そうなんですか？」

美雪が、少し大きめのため息を吐いてから、ポツポツと話し出した。

「あの人の雑誌が、ダメになった時にちよっとケンカして…。それ以来、帰ってきてないわ」

「…そう、ですか」

「そう。だから、二人じゃさみしいから、来てくれるんなら、来て」  
郁実は、それ以上何も聞くことはせず、「はい、わかりました」と答えた。

「お花屋さんだ！」

小さな女の子が、郁実の足元に駆け寄った。

「お花屋さんだよー。入選おめでとう」

そう言って花のブーケを手渡した。ちひろは、「わーい！」とピンク色のブーケを両手で抱きしめた。

「これは、俺からね」

と、花の形のペンダントをプレゼントした。ちひろは飛び跳ねて喜んだ。小走りにお母さんのところまで行くと、「つけて〜」と差し出した。美雪がかがんでペンダントを首にかけてあげた。すると、ちひろは洗面所まで駆け出し、鏡で自分の姿を見ながら、可愛らしいポーズをいくつもとった。

「これ、運びますね」

「ありがとう」

郁実が、美雪がキツチンで用意したごちそうをテーブルに運んだ。少し、家の中を見回した。わかっていたことだが、やはり、聡はいなかった。

準備が整うと、美雪がちひろを呼んだ。ちひろは「はい」と走って来た。テーブルに並んだごちそうを見て、「すごい！」と喜んだ。しかしその後、ごちそう、美雪、郁実の順番に視線を移すと、また美雪を見上げた。

「…お父さんは？」

美雪は、言葉に詰まってしまった。

「…いないの？」

「うん…。ごめんね」

「うん…」

ちひろは、うつむいた。

「お母さんは、お父さんを嫌いになっちゃったの？」

「そうじゃないの。そうじゃないんだけど…」

「お父さんとお母さんが仲良くないの、悲しいの」

「うん…」

美雪は、一息をつくくと、ちひろの前でしゃがみこみ、両手でちひろの肩を持ち、目を見て言った。

「確かに最近、お父さんはいないし、お母さんは笑ってないね。ごめんね。家の中も、空気が暗いね。ごめんね」  
「でもね」と、美雪はつぶけた。

「でもね、あなたのそばには、たくさんの幸せがあるのよ。それは、わかってようね」  
そう言つて美雪は微笑んだ。ちひろは、首を傾げてこう言った。

「それをわかったら、お父さんとお母さんは仲良くなる？」

美雪は、この質問には、答えられなかった。

「さっきの会話……」

郁実が、空いた食器を重ねている美雪に話かけた。ちひろは、ごちそうを食べ終えておなかがいっぱいになり、自分の部屋でぐっすりと眠っていた。

「ん？」

「さっきの、あなたとちひろちゃんの会話」

「……ああ、聞いてた？」

「ええ。すいません」

美雪が郁実の顔をチラッと見た。

「別に、いいわよ、謝らなくて」

「ただね」と美雪は言葉が続けた。

「ただ、あの子にはわかつて欲しいのよ。いつだって、自分の周りにはたくさんの幸せがあつて、それに囲まれて生きてるってことを」

郁実はだまって聞いていた。

「だってそうでしょ？いくら大きな幸せが目の前にあつたつて、それに気づけなきゃ、幸せになんてなれないわ」

「それは、そうですね」

「でしょ？」と美雪は笑顔を見せた。その笑顔に、郁実は少し腹が立った。

「でも」

郁実が少し強めに言った。

「でも、あの子の言いたいことは、そういう事じゃないと思うんです」

「なに？」

「あの子は、ただ、お父さんとお母さんに、仲良くしてほしいんです。それだけなんです」

「でもね……」

「確かに、あの子の周りには幸せがたくさんあるのかもしれない。それに気づくことも大事だと思います。でも、そんな幸せは、あの子にとっては、あなた達の仲が悪くちや、なんの意味もないんです」

美雪は、郁実と目を合わさずに聞いていた。

「あなたは、自分の周りの幸せに気づかないと幸せになれないって言うけど、その幸せに気づけるように、あの子の周りを明るくできるのは、あなたたちなんですよ？」

郁実がひとつ、息を吸った。

「あの子を幸せにできるのは、あなたたちだけなんです」

そう言うと、「ふうー」と息を吐いた。

「俺には、あの子が、あの日の俺と同じに見えました」

美雪が郁実の目を見た。

「あの日？」

「俺の指輪がつぶれた、あの日です」

「……ああ」

「あの時も、あなたは同じことを言っていました。自分の周りの幸せに気づけなければ、幸せになれないと。でも、そんな事は、どうでもよかったんですよ、あの時の俺には。そんな事より、目の前の悲しみを、どうにかすることが先決だった。それについての言葉が欲しかった」

「せめて……」

郁実が、ひとつ、呼吸を置いた。

「せめて、私がいると、言ってほしかった。自分が味方だと、言ってほしかった。俺のことを、他人に丸投げしないで欲しかった。『大丈夫よ、頑張つて』と言ってほしかった。目の前の悲しみと向き合う力を、親だとか、夢だとか、そんなものではなく、あなたからもらいたかった」

郁実がひとつ、息を吸った。

「正直、ものすごく辛くて、悲しかったです。あの時の、あの時間は」

郁実が、「ふう」と息を吐いた。美雪は、郁実に、少しにらむような目を向けて言った。

「辛かった、悲しかったっていうけど、私には平気そうに見えたわ」

郁実は、床を見ていた。

「あなたは強い人でしょ。あんな事でへこたれるような、そんな弱い人間じゃないでしょ。少なくとも、私の目に見えたのは、悲しみと向き合い戦っている、強い郁実だったわよ」

「言つたでしょ。私は目で見たものしか信じないのよ」

美雪が、冷たく言った。郁実が、笑った。

「じゃあ、見せてあげますよ」

郁実は、ケーキのクリームのついたナイフを手にとつた。そして、美雪に笑顔を見せた後、ゆっくりとナイフを持つた右手を高く挙げた。

「…え、ちよつと!」

美雪が声をあげるかあげないかのタイミングで、郁実は自分の左腕をナイフで刺した。ズブリ、という鈍い音がした。郁実は、そのあと何度も左腕を刺した。刃物が人間の肉を切り裂く鋭い音が美雪の耳に何度も響いた。

「ちよつと…やめなさい!」

美雪が郁実のナイフを持った右手をおさえようとしたが、郁実の右手はそれをかわし、左腕を傷つけ続けた。

「やめて! やめて! …やめてつてば!」

美雪が郁実の右腕は諦め、血だらけの左腕を自分の体で右手の攻撃からかばった。右手の攻撃の矛先が右の太ももに変わった。耳に響く音が、より重たく鈍くなった。

「やめてよ! …! ごめん! やめて! お願い! もうわかったから! 謝るから! お願いだからやめて!」

「ぐしゅっ」という刃物が肉から抜ける音がした後、郁実と美雪の体がつれて床に倒れた。その瞬間、美雪が郁実の右腕からナイフを取り上げた。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

美雪は、ナイフを両手で握りしめ、その場に座り込んだ。恐怖や衝撃の入り混じった感情が体中を巡り、涙が溢れ、全身が震えた。

「どうですか？」

郁実が尋ねた。その声は聴こえていたが、美雪は、目を開けられなかった。

「分かりやすく、目に見えるようにしましたよ。どうですか？」

美雪は、見れなかった。

「目で見たものしか信じないのなら、しっかりと、見てください」

美雪は、目を開けられなかった。目の前は、真っ暗だった。その時、美雪の右ほほに冷たいものが触れ、「べちゃっ」と音をたてた。

「いま、何が触れているか、分かりますか？」

美雪は、体が震え、声を出せなかった。

「ね。目で見なくても、分かることってあるんですよ」

美雪のほほから、冷たいものが離れた。

「目に見えるものだけが、全てじゃないんです」

そう言った郁実が立ち上がり、立ち去ろうとしているのが気配でわかった。

「そんなに・・・」

美雪は、震えた声を出した。郁実が立ち止まった。

「そんなに、辛かったの？」

美雪は、目を閉じたまま、郁実の答えを待った。

「こんなもん、くらべもんになりませんよ」

郁実が、足をひきずつて歩く音が部屋に響いた。

「あの、大丈夫ですか？」

花屋に、さやかが来ていた。さやかが差し入れにシュークリームを持ってきて、郁実がコーヒーを淹れた。

「ああ、これ？」と、郁実は腕に巻いた包帯を気にした。

「ちよつとね、手元が狂って、切っちゃってさ」

「ああ、いや、それじゃなくて」

さやかがそういうと、郁実は「ん？」と返事した。

「そんな傷は、多分、郁実さんなら平気です。強いですから」

そう言われて、郁実は「ははは」と笑った。

「そんな傷も平気ですし、足を引きずってるのも、多分、大丈夫です。でも、その傷が大丈夫なくらい強い郁実さんが元気がないのは、ちよつと、気になります」

そういうと、コーヒを一口すすった。小さな声で「にが」と言うと、スティックの砂糖を二本分入れた。また一口すすって、「うん、おいしい」と笑顔でつぶやくと、郁実の顔を見た。郁実は、笑顔だった。

「心配してくれてありがとうね。でも、大丈夫だよ」

そう言うと、郁実はもう一度笑顔を作った。さやかには、その笑顔が悲しく見えた。

「…なんで、美雪さんの前で泣かないんですか？」

「ん？」

「美雪さんだって、優しい女の人じゃないですか。泣いたっていいじゃないですか」

「ん？あー…」

郁実が、さやかと美雪でした会話をなんとなく理解した。

「あの人、自分じゃ、『私は優しくくない』なんて言ってますけど、そんなことないと思います。美雪さんも、優しいと思います」

「うん、あの人はすごく優しいよ」

「きつと、郁実さんの涙も、受け止めてくれると思います」

「あの人には、俺の涙を受け止める余裕なんてないよ」

「いや、そんなこと…」

「ああ、ちよつと言ひ方間違えたな。余裕がないんじやなくて、そんな余裕があるなら、その余裕は、旦那さんとか、ちひろちゃんの涙を受け止めるためのものなんだよ。俺のための余裕じゃない」

そう話す郁実を見て、さやかは、「優しいなあ」と思った。同時に、「強いなあ」とも。優しさも、強さも、この人は両方持っている。でも、強い人も、弱る時があつていいんじやないだろうか。

あの指輪は、いつも小指につけている。より楽しい時間を過ごせるようにと、代金を待つてくれた。あの時、初対面にもかかわらず、「君は優しい子だから」と信頼してくれたのだと、思い出した。

「…郁実さん」

「はい」

「あの、私、今、彼氏とかいないんですよ」

「ん？」

さやかが唐突に言い出し、郁実は戸惑った。

「もちろん、子供なんかもいないですし」

「うん」

「両親も仲がいいですし、友達も、みんな元気です。お兄ちゃんには彼女がいます」

「ん？うん」

「だから、あの、」

「うん」

「泣いて、いいですよ」

そう言われて、郁実は驚いて、さやかの顔を見た。さやかと目が合い、一瞬間が止まったあと、郁実は、大きな声で笑った。

「あっはっはっはっは！」

「あ、ちがいますよ。笑っちゃだめです。泣いてください」

さやかが困った顔をした。郁実の笑い声は止まらなかつたが、その目から、涙がぼろぼろとこぼれ始めた。

「あつははは。うん、ありがとう。ありがとう」

と言いながら、郁実は笑顔のまま、涙をぬぐった。

「まだ笑ってるじゃないですかあ」

「いやいや、泣いてるじゃない、ほら！」

「それ、ちよつと違くないですか？」

「違くないよ、違くないよ。あははははは」

「違くないじゃないですか。笑ってるじゃないですか」

郁実の笑いは止まらなかつたが、その目からは涙も次々と、とめどなく流れていた。それと共に郁実の胸の中にあつた、重たく、どろどろとしたものがなくなっていくのを郁実は感じていた。

「自分は強くないとはいけない」その気持ちから、郁実が強い力で固く閉じていた涙の蛇口。その蛇口を開けたのは、さやかの優しい心だった。

「違くないよ。ほんとに気持ち軽くなつたよ、ありがとうね」

「本当ですか？」

「うん、本当」

そう言つて、郁実が涙をぬぐうと、お互いの目が合った。が、一瞬の間において郁実はまた嘔き出してしまった。

「ぶつ。あははははははははは」

「やっぱり笑ってるじゃないですか！」

そういうと、さやかも一緒になつて「あははは」と笑つた。

「泣いてくださいよ」

「泣いてるって！」

「なんで笑うんですかあ」

「いやあ、可愛いなあつて思つて」

「なつ！バカにしてるでしょ！」

「してない、してない。あははははは」

さやかは腑に落ちていなかっただが、郁実の気持ちも軽くなっていったのは本当だった。気持ちだけでなく、体も、まるで翼が生えたかのように軽くなったように感じていた。見えている世界も違っていった。今まで、まるで霧がかかっているように霞んで見えていた世界が、明るく見えていた。

「さやかちゃん」

「はい」

「本当にありがとう」

郁実が笑顔で言った。さやかは、今までで一番素敵な笑顔だと思った。さやかも、照れくさそうに笑った。

「ごめんなさい」

郁実が美雪に頭を下げた。さやかが涙を受け止めてくれたおかげで、郁実は、自然に、謝罪の言葉を口にできた。

「俺に、ああいう一面があることは、自覚してました。冷たくて、どんな残酷なことも簡単にできてしまう人間が、自分の中にいると……」

郁実が、唇をぎゅつと噛んだ。

「俺は、ああいう人間なんです。俺の本性は、あいつなんです。自分の目の前で、人がキズついて、それを見て、もつとキズつけようとする。それが、俺の本性なんです」

「でも……」と言ったところで、郁実が左手をぎゅつと握った。美雪の目に、左腕に巻かれた包帯が見えた。

「でも、ああいう自分が嫌いなのは本当なんです。だから、あいつをなくしたいと、あいつを自分の中から消したいと思ってたんです。だから、優しい心を手に入れば、優しい自分を心掛けていけば、いつか、あいつは居なくなるって思ってたんです。でも、ことあるごとにあいつは出てきて……」

「そして、ついに、あいつは、あなたの前で出てきてしまった」

郁実が、大きく息を吸い、吐いた。

「『大事な人です』と伝えたあなたを、キズつけてしまった」

郁実が、もう一度大きく息を吐いた。

「結局、演じてただけなんです。自分を偽っていただけで、俺は、花のようになって生きてこれていないんです」

「俺は…」と言ったあと、郁実は、言葉が続けられなかった。郁実が、悔しさをにじませ、自分を責めるような表情をした。その郁実の頭を、美雪が優しくなでた。

「それは、ちがうわ」

美雪が言った。郁実が目を上にあげた。

「あなたが、ああやって人を攻撃するときには、いつも、その相手が、人として間違ったことをした時だけよ。決して、自分の気持ちだけで人をキズつけたりはしないわ。あの事件の時だつてそうだし、今回だつて、私は、間違つていたわ。それに、今回は、郁実は私をキズつけようとしたんじゃない。あの子を守ろうとしたのよ。しかも、傷つけたのは郁実自身で、私じゃないわ」

美雪が、郁実の両手を取り、優しく包んだ。

「ああいう人間が、郁実の中にいるのかもしれない。それが、表に出てきてしまう時があるのかもしれない。でも、優しさや強さはいつも心にあるのよ。郁実は、強くて、優しいわ。強くて優しい、花のような人よ」

「私の方こそ、ごめんなさい」と美雪も頭を下げた。郁実は、黙って首を横に振った。

「今回のことだけど…あの時も」

郁実が頭を上げて、美雪を見た。

「あなたの言う『泣いちゃいけない』は、『泣きたくない』って意味なんだと思つたのよ。あなたにとって、『強さ』は、誇りみたいなもので、生きていく上での、気持ちの柱みたいなものなんだと思つたの。私が涙を流させたら、その柱が折れちやう気がしたのよ。だから、郁実を『強い者』として扱うのがいいんだと思つたの。郁実の『強さ』を疑わないのが、一番いいんだと、そう思つたの。でもそれは、もしかしたら、私が郁実に強く居て欲しかっただけなのかもしれない。あなたの強さを、絶対的なものだと思つたのかもしれないわ。その柱に、寄りかかっていたいから。本当に、自分勝手な気持ちで、あなたをキズつけてしまったと思う。本当に、ごめんなさい」

美雪が、もう一度頭を下げた。郁実は「そんなことないです」と微笑んだ。

「あの時から俺は、もっと強くなろうと思つて生きてきました。あなたの言う通り、あの時泣いてたら、俺の柱が折れて、ここまで生きてこれなかったかもしれない。それに、ここまで俺の強さを信頼してくれてた事が嬉しいです。

これからも、もっと、強くなろうと思います」  
郁実が「にっ」と笑った。美雪は、一度目を閉じた。

「それと…ありがとう」

「…え？」

「あの後、二人で話し合ったわ。ちゃんと、お互い向き合って」

「ああ…はい」

郁実が笑顔になった。

「二人で支え合いながら生きていこうって。お互いのいいところも悪いところも、受け入れたり、時には改善したりしながら、気持ち話を話あって、生きていこうって、話したわ。人の気持ちは目に見えないから、ちゃんと話し合おうって」

「何より、ちひろのためにね」と美雪が笑った。郁実は「それは、良かったです」と微笑んだ。

「おかーさん？」

ちひろが部屋に入ってきた。起きたばっかりなのか、目を手でこすっていた。美雪が「おいで」と手招きした。

「お花屋さん、こんにちは」

美雪がそう言い、それに続いてちひろも「お花屋さん、こんにちは」と頭を下げ、郁実も、「こんにちは」と頭を下げた。

「お花屋さん、おてていたい？」

郁実の左腕に包帯が巻いてあるのを見つけたちひろが、そこを優しく撫でた。

「ん？痛くないよー？」

「でも、おけがしたんでしょ？」

「お花屋さんね、強いから、そんなの全然平気なの」

「おいで」と、美雪がちひろを膝の上に乗せた。

「そうだよ、強いから平気なんだよ」

「そうなんだ、すごい」

「ねー、お花屋さんはすごいねー」

「ねー、こないだ、お父さんは、はさみでチクってしたら、『いたい、いたい』って言ったのに」

「お父さんは弱いねー」

美雪が、ちひろの頬にちゅーをした。

「ね、お父さん、よわーい」

「きゃはは」と、ちひろがぐすぐつたがった。

「ちひろちゃん、お父さんが痛がってたら、お薬ぬってあげてね」

郁実がちひろの頭をなでた。

「しよーがないなー」

とちひろが言い、美雪と郁実が大笑いした。

花屋に、聡が来た。雨が強く降っていて、肩や、ズボンの裾が濡れていた。郁実が、「いらっしやいませ」と出迎え

た。聡が、傘を閉じた。

「今回のことは、ありがとうな」

そう言っつて、頭を下げた。

「ああ、いえ、とんでもない…」

「ケガまでさせちまって、申し訳なかった」

また、頭を下げた。

「いやいや、これは自分でやったことですし」

郁実が、笑いながら左腕を右手でさすった。聡が、五年前のあの事件を思い出し、「…ごめんな」と言った。

「何がですか？」

「俺が弱いせいで、お前の左腕は傷だらけになっちったな」

聡が、切ない顔をした。郁実が、「ふふふ」と笑った。

「かっこいいでしょ？」

郁実が、どや顔を聡に見せた。聡も、「ははっ」と笑った。

「ああ、お前はかっこいいよ。本当にかっこいい」

真正面からそう言われ、郁実は照れくさくなって、「褒めても何も出ませんよ」と冗談っぽく言った。

「出せよ」聡もその冗談に乗っかり、ヘラヘラとそう言った。二人で、笑った。

「いいえ、出しません。だから、俺なんか褒めてないで、」

「ん？」

「ちひろちゃんを褒めてあげてください。ここで、一生懸命に絵描いてましたから」  
聡が、ニツと笑った。

「ああ、思いつき褒めちぎってやったよ。嫌がられる程にな」

そう言われ、郁実も笑顔になった。聡が「それでさ、」と言った。

「花、売ってくれないか」

郁実が、微笑んだ。

「ええ、いいですよ。どんなお花がいいですか？」

「美雪が、喜びそうなやつ」

そう照れくさそうに言う聡を見て、郁実はうれしくなった。

「わかりました。花束、作ります」

「おう、頼むよ」

美雪の好きな色は「雪のような白」だった。郁実が、白い花を中心に花束を組んだ。それを渡すと聡は、「これは喜び  
そうだな」と微笑んだ。

「ありがとう」そう言って、花束を抱え、頭を下げた。郁実も「こちらこそです」と頭を下げた。

「雨、ひどいですね」郁実が外を覗き込んだ。

「おう、参っちゃったよ」

「あったかいの、どうですか？」

「お、コーヒー？いいの？」

郁実が一度裏に入り、マグカップを二つ持って出てきて、一つを聡に差し出した。

「…コーヒーじゃねえな」

「飲んでみてください」

聡が、一口すすった。

「…紅茶か？」

「オレンジペコーです」

「…ああ、これが」

「初めて飲んだ」と聡が笑った。

「そっか。これがあいつの好きな味なんだ」

もう一口すすると、「美味しいな」と言って微笑んだ。郁実も、一口すすった。郁実も飲むのは初めてだったが、美味しいと思った。

「この味、覚えとくよ」

そう言うと、聡は花束を抱え、傘を差し、店を出た。雨が相変わらず激しく降っていたが、その雨をもらともしない、しっかりとした足取りの後姿は、男らしく見えた。郁実はその背中に向かって、

「かっこいいのはあんただよ」

と言った。

郁実は、そのかっこいい背中を、姿が見えなくなるまで見送った。

夕方、店の電話が鳴った。聡が帰った後しばらくして、さやかが遊びに来ていた。「ごめんね」と手で合図をすると、郁実は受話器を取った。さやかがカップを両手で持ち、「ずずつ」とコーヒーをすすった。

「はい、『フラワーショップいくみ』はウチですが…はい…はい…」

さやかは、「いつもの注文の電話とは違うみたいだな」と様子を見守っていた。

「警察!？」

郁実が驚きとともに放った言葉に、さやかも驚いた。

「はい…はい…知ってますが…」

さやかは、音が立たないように静かにカップを置いた。

「…はい…はい…。え?…そうですか…」

郁実が、さやかを見た。さやかは、手で「帰った方がいいですか?」と合図したが、郁実も、手で「いてくれていい」と合図した。

「そうですね。はい…。いや」

そこで、郁実の目に、わずかに迷いが見えたのを、さやかは見逃さなかった。

「俺が、伝えます」

郁実はその後、一言二言電話口で話すと、受話器をおろした。そして、険しい顔になり、目を閉じると「ふう〜」と大きな息を吐いた。心の中で、何かを整理しているように見えた。さやかは黙ったまま、郁実の言葉を待った。

「聡さんが…美雪さんの旦那さんが、事故にあった」

「え…」

「車に撥ねられて…即死だったって」

さやかは、何も言えなかった。

「携帯が、事故で大破して…連絡先がわからず…。聡さんが買ってしまった花束に挟んだ店のカードの番号を見て、電

話してきたんだって：」

郁実が「ふう」と小さく息を吐いた。

「今から、美雪さんに伝える」

さやかが小さく頷くと、郁実が受話器をとった。が、耳元まで持つていく前に、受話器をおろした。

「…直接行った方がいいか」

一瞬、郁実の目が泳いだ。その目を見て、さやかは初めて、郁実に対して「心配」を覚えた。郁実が、一度裏に入り、エプロンを脱いで、上着を着てきた。さやかも椅子から立ち上がった。

「私も、行きます」

郁実は、空中を見つめたまま、少し、黙った。

「…ありがとう」

そう言われ、さやか「はい」と返事をし、二人で店を出た。太陽は出ていなかったが、雨は止んでいた。灰色の空の中、二人は美雪の家まで歩いた。

道中、さやかが見た郁実の顔は、緊張していた。この人は、きつと今まで、こうやって生きてきたのだと思った。警察から電話がかかってきた時、美雪の電話番号を伝えればいいだけの話だ。でも、そうしなかった。自分で電話で伝えるという事もできた。一度受話器を上げたのは、そうしようとしたのだろう。でも、受話器はそのまま下げられ、直接伝えに行くという選択をした。少しでも、美雪の心の負担を軽くするためだ。美雪が悲しんだとき、すぐにフォローが出来るようにだ。きつと、聡が事故にあり、まだ、意識があるという状態なら、一刻も早く、電話をかけただろう。でも、そうしなかった。そこには、ある種の残酷な判断があったのだ。

きつと今までも、こうしてきたのだろうと思った。誰かを悲しませないために、誰かの心の傷が出来る限り小さく済むように、誰かの負担が少しでも軽く済むように、自分の心をすり減らしてきたのだと思った。

「自分も行く」と言った時、郁実「ありがとう」と答えた。その返事は、さやかの期待通りでもあり、意外でもあった。「いや、大丈夫だよ、ありがとう」と、やんわりと断られる事も、予想していた。しかし、そうではなかった。今から向かう先は、この人が人の力を必要とする場所なのだと、さやかは、気持ちを引き締めた。

美雪の住んでるマンションの大きな正面玄関まで着くと、パネルで美雪の部屋番号を押し、美雪の部屋を呼び出した。

「はい」

美雪の声が聞こえる。

「郁実です」

「あら、どうしたの？」

「ちよっと、お話、いいですか？」

「いいわよ、ちよっと待ってて」

マンションの大きなドアが開いた。

「いま、行きます」

「はい」

美雪がインターホンの受話器をおろす音を聞いて、二人は開いたドアをくぐった。その後、エレベーターで美雪の部屋がある階まで上がる。美雪の部屋は三階にあった。三階ならば、階段で上がった方が早い。しかし、今日はエレベーターを選んだ。その選択は、郁実の気持ちを表わしていた。

エレベーターが三階にたどり着き、美雪の部屋の前まで来た。郁実が、一呼吸置く事もなくインターホンを押した。

「はい」

美雪がドアを開けた。ちひろと手をつないでいた。ちひろの姿を見て、郁実の心がぐらついた。

「あら、さやかちゃんまで」

「こんにちは」

さやか小さくお辞儀をした。

「…どうしたの？」

郁実は、わかりやすい。郁実の様子に、美雪も少なからず緊張した。

「ちよっと…」

と、郁実がちひろを気にしたのを、美雪もさやかも気づいた。

「ちひろちゃん、お姉ちゃんと一緒にあそぼつか」

さやかがそう言つて、「うん！」と答えるちひろの手を引いて家の中に入っていった。さやかが美雪と目を合わすと、美雪も「よろしくね」という意味で頷いた。郁実は、さやかがいてくれて本当に良かったと思つた。郁実が、一歩家の中に入り、ドアを閉めた。

「…どうしたの？」

さつきよりも、少し、小さめの声だった。

「実は…」

郁実が話し出した。さやかが一瞬、玄関の方を気にした。ちひろが、「なにしてあそぶー？」と尋ねた。さやかは、ちひろを見て微笑むと、「抱っこ抱っこしよつか」と言い、両手を広げた。ちひろが「うん！」とさやかの胸にとびついた。さやかは、ちひろを思いつき抱きしめた。ちひろは「きやー」と声を上げたが、さやかがちひろの頭を自分の胸におしあてて、その声が外に漏れないように、外の音が、ちひろの耳に入らないようにした。その時、美雪も、郁実の胸でちひろと同じ姿になっていた。静かな、静かな時間だった。

「郁実…」

「はい」

「どうして郁実はそんなに強いのか？」

「え？」

「なんで聡はこんなに弱いのか？」

「美雪さん…」

「なんで？車に轢かれただけよ？どうして？たかが車よ？どうして？なんで？なんで聡はこんなに弱いのか？」

「ずっとそばにいるって言ったじゃないのよ…」

その後、美雪は言葉にならない声をあげて泣き続けた。美雪が最後に呟いた一言が、郁実の耳に重たく残った。

それからの時間は、あつという間に過ぎていった。通夜や葬式には、郁実も花屋として手を貸した。美雪は、ちひろの前では、気丈にふるまっていた。ちひろも、なんとなく状況は理解しているようで、終始おとなしく、お利口にしていた。色んなことが落ちて着いてから、郁実はあの日、聡が買って行った花束を新しく組みなおし、美雪に届けた。

「美雪さん、これ…」

「なに？」

「あの日、聡さんが、俺のところに買いに来た花束です。『美雪さんが喜びそうな花』が、注文でした」

「そう…ありがとう」

美雪が、花束を抱きかかえ、眺めた。

「こんな素敵な花束、見た事ないわ」

「こないだは、ありがとう。本当に助かった」

店に来たさやかに、郁実がお礼を言った。さやかは「ああ、いえ…」と右手を小さく振った。

「まだ、落ち込んでますか？」

さやかが、差し入れに持ってきたコンビニのプリンを食べながら言った。

「うん…。ちひろちゃんの前だと、元氣に見せてるけど…まだね」

そう言った郁実の顔を、さやかが少しの間見つめたあと、「…ああ、ちがいます」と首を横に振った。郁実が「ん？」とまゆを上げた。

「お姉さんじゃなくて、郁実さんが」

そう言われ、郁実は「ははは」と笑った。

「さやかちゃん、鋭いなあ」

郁実がコーヒを淹れて持ってきた。さやかはすぐに砂糖を二本入れた。

「私が鋭いんじゃないかと、郁実さんがわかりやすいんです」

郁実は、美雪とこの子が、なんだか似てきているような気がした。

「あの人にも言われるなあ、そんなこと」

「お姉さんですか？」

いつの間にか、さやかは美雪のことを「お姉さん」と呼ぶようになっていた。

「うん。昔っからずっとだよ、『本当にわかりやすい』って笑われる。そんなに顔に出てんのかな」

「顔っていうか、全身から出ますよ、オーラが」

郁実はまだ、「ははは」と笑った。「似すぎじゃないか？」と思っただが、口には出さなかった。

「で、どうかしたんですか？」さやかがコーヒをすすった。

「いや、どうかしたっていうか…どうもしないっていうか…」

「何も変わってないってことなんです」

「うん。美雪さん、ちひろちゃんの前では気張って笑顔なんだけど、でも、一人になると悲しそうな顔しててき。ちよっと、見てられなくて。元気出してとも言えないし」

「そうですね…でも…」

「ん？」

「何とかできるのは、郁実さんじゃないのかも」

「そっか…そうだよなあ…」

郁実が悲しい顔をし、さやかが慌てた。

「ああ、いや、郁実さんが頼りないとか、そういう意味ではなくて」

「ああいや、わかってるよ、ありがとね」

「でも、それこそ、お姉さんの言う通りなんだと思うんです」

「あの人の言う通り？」

「お姉さんのよく言う、『自分の周りには、幸せが必ずある』ってやつです」

「ふむ…」

「きつと、今度は、お姉さんが自分で気づかなきゃいけないんですよ。自分にある幸せに」

「なるほどね…。そうなのかもなあ…」

「周りは、見守るしかできないんじゃないでしょうか。ちよつと冷たいかもしれないですけど」

「さやかかコーヒーをすすった。郁実も「冷たくなかないよ」とコーヒーをすすった。」

「今の言葉で、俺の悩みは少し、溶けたからね。さやかちゃんは、やつぱり、優しいよ」

「そう言つて笑つた。さやかは「なら、いいんですけど…」と照れくさそうに笑つた。」

「自分で気づかなきゃいけないかあ…」

さやかか帰つたあと、郁実は、店の前に広げている鉢植えの花に水をやりながら、ぼやつと考えていた。目の前には、たくさんのお花が咲いている。ちひろは、これを「お花畑」と表現した。空は曇っていた。花には、ありがたかない天気だ。花は、人の人生のあらゆる場面を、脇役として彩る。そして、その花は、水や日光から栄養をもらい、キレイな花を咲かす。生き物は必ず、誰かから、何かから支えられて生きている。人も、花も同じだ。一輪、枯れかけている花をみつけた。その花に手を触れ、観察してみた。元気がない人間というのは、いわば、枯れかけの花のようなものだろう。この花に、水を与えず、日の光にも当てず、「自分で気付け」と、見守るといふ事か。

「それでも、なんとかしてあげられないかなあ…」

「そう呟いて、その花に水を与えようとした。しかし、じょうろに水が入っていなかった。」

「そっか…」

今の自分は、水を持ってすらいけないのだという事実を突き付けられた。しかし、なんだかそれは、お花からも「そつと見守つてあげなさい」と言われている気がした。

郁実は、一つ、息を吐いた。

「ふう」

そして、お花の言う事に従う事に決め、空のじょうろを手に持ち、店の中に入った。郁実の背中で、雲に覆われていた太陽が、少しずつ顔を出し始めていた。

「すみません」

「はい、いらつしやい。…あら」

花屋にやってきたのは、ちひろだった。郁実は「どうしたの？ひとりで来たの？」と言いながらちひろの目の前にかがんだ。

「あのね、お花ください」

「いいよ。どんなお花？」

「どんなお花ですか？」

「え？」と郁実が少し戸惑いながら笑った。すると、ちひろが言った。

「お母さんが元気になるお花は、どんなお花ですか？」

「…ああ」と郁実が返事をした。

「あのね、お母さん、元気がないの。お母さんにね、元気だして欲しいの。だからね、お母さんが元気になるお花、ください」

「そっかあ…」

と郁実が立ち上がって、ケースの扉を開け、中の花を見た。その時、さやかの言葉を思い出した。

「きつと、今度は、お姉さんが自分で気づかなきゃいけないんですよ。自分にある幸せに」

その言葉が頭をよぎり、郁実は、そばでちょこんと立っている小さな女の子の顔を見た。

「美雪さんにある幸せか…」

そして、ケースの扉を閉めると、また、ちひろの前にかがんだ。

「お花よりも、お母さんが元気になるおまじない教えてあげる」

「お花よりも元気になるの？」

「うん。なるよ」

「お花屋さん、知ってるの？」

「知ってるよ。あのね…」

「ただいまー」

ちひろが家に帰ると、美雪は「おかえりなさい」と笑顔で迎えたが、少し無理した笑顔だった。ちひろが、美雪の前に小走りに「とととつ」と近寄った。

「お母さん」

「ん？」

「あのね」

「うん」

と美雪がちひろの前にかがんだ。ちひろが少し、照れくさそうにした。

「見てー」

そう言うと、ちひろは両手を広げ、ニツコリと笑顔を作った。その笑顔に、美雪は自然と笑顔になった。

「なあに？」

「ちひろちゃんを見てー」

「ふふ。見てるわよ。とっても可愛いわ」と、美雪がちひろの頭をなでた。ちひろが「えへへ」と恥ずかしそうにした。そして、「あのねー」と言うと、「うん」と美雪が返事をした。

「ちひろちゃんはね、お母さんが大好きなの。だからね、ずっとお母さんのそばにいるの。だからね、お母さんの幸せは、ずっとここにあるよ」

そう言うと、またニツコリと笑顔を作った。

「その目で、しっかり見て」  
ちひろのその言葉が耳に入ると、美雪の胸に、さまざまな感情が湧き上がった。しかし、それはどれも、幸せな感情だった。

「ね、お母さん」

とちひろが言うが早いか、美雪がちひろを「ぎゅっ」と抱きしめた。美雪は、泣いていた。

「お母さん？」

美雪は、泣きながら、「うん…うん…」と頷いた。

「そうだね。そうだね。ちひろちゃんがいるもんね」

「そうだよ、いるよ」

ちひろも、美雪を抱きしめ返した。

「そうだね。そうだね」

美雪が大きく鼻で息を吸った。すると、ちひろから花の香りがした。それで、ちひろがどこにでかけ、何をしていたかがわかった。

「本当に、わかりやすいなあ」

美雪が小さくつぶやいた。

「お母さん？」

「んー？」

「いま、幸せ？」

「とっても幸せよ」

「どれぐらい？美味しい紅茶を飲んだときぐらい？」

「ふふふ」

美雪が笑った。

「そんなもの、くらべものにならないわよ」

翔太鈴木 芸人もどき。役者くずれ。嘶家的存在。  
独り舞台や、短編ライブ「Live 下心」などを行う。  
本作、「オレンジペコー」で、小説執筆に挑戦。  
Twitter →@syotta131  
BLOG→<http://ameblo.jp/syoutasuzuki/>

表紙デザイン 島田翔太郎 <http://shotaro.tokyo/>